

【日本語訳】

親愛なる知恵子さんへ

方晴嵐
華東理工大学

親愛なる知恵子さんへ

こんにちは。

横浜で別れてからしばらくになります。当時、北野天満宮の白梅がちょうど見頃だったので、評判を聞いて横浜から夜行バスで京都を訪れました。しかし今や中国各地でモクセイの香り漂う季節です。長らく会っていませんが、近況はいかがでしょう。

こここのところ読んでいる本について語ろうと思い、今日お便りしています。往々にして読書感想文を書くたび、あれこれのきまりや制限に従って、さらに参考図書目録を列記しなければならなくて、頭が痛くなります。確かに、読書感想文の書き方は人それぞれです。文ごとに抜き書きして、敬慕する文言を慎重に収集する人。問題の要点をつかんで、書籍の主要な観点をいちいち記録する人。自由奔放、気の向くまま自分の得たものを自由自在に書く人もいます。しかし私は手紙を書く方法を通じて、自分の乱雑な考えをかいつまんで話そうと思います。独り言の寂しさも避けられますし。

今回、私が読んだのは家永三郎先生の『日本文化史』です。この本は読んだことがあるのですが、内容はすでにすべて忘れていました。改めて手に取ると、たちまち古い友人に会ったように感じ、過去に考えたことがまた湧き起こってきます。

家永先生は時代の順にこの本を書いています。時代ごとに生産力は異なり、時代ごとにその時代の特徴に合う文化しか創造できません

ん。たとえば武家の特色ある能と狂言は南北朝時代に形成され、市民文化の特色に満ちた歌舞伎とかな草子は市民階級が繁栄し強くなった江戸時代に出現しています。我々は現代に生活しているので、視野の限界はすべて現代人の限界です。近代以前の人の考え方は私たちの考え方と天と地の差がありがちだな、と私はいつも感じています。一個人は自分の考え方が存在しない世界観と価値観を絶えず学んで、そうした世界観と価値観に対する理解の程度を高めてこそ、自分の魂の奥深くがいったい何を求めているのかを知ることができます。一個人が文化と考えの上の衝撃に直面したとき、受け入れて自分を変えることを選ぶか、自分の考え方を引き続き保つことを選びます。結局、必ずしも過去から残る観念をすべて受け入れる必要はないのです。そうした取捨選択の中でこそ、絶えず成長することができます。今の人は物事の意味を討論することを好んでいますが、だいたいは私たちが歴史を学び過去の文化を知る意味についてでしょう。実は時として旅行もそれに似た意味があります。拡張するのが空間上であって時間上ではないというだけです。

こうした道理は国や民族にもあてはまると思います。日本はとて矛盾した民族だとずっと思ってきました。ここで言う矛盾は、ルース・ベネディクトが『菊と刀』で述べているような矛盾した民族の性格と完全にはありません。大和民族は矛盾した事物を処理する独特な技巧を持っているようです。たとえば自国の文化と外来の民族文化との矛盾については、古くは日本文化と中国文化の矛盾が書かれた書物があり、今の本では書かれていない日本文化と欧米先進国の文化の矛盾もあります。さらに伝統文化と現代文化の矛盾。現代の日本社会、伝統芸術の芸能文化が生き生きと繁栄しているうえに、現代的なサブカルチャーも鮮やかに咲き乱れています。その例として、前者では天野喜孝のデザイン作品でミュシャなどの欧州の芸術と浮世絵の風格が融合していること。後者は多くの尺八の大家が

ヘヴィメタルと協力して新しい流派を創造したことが挙げられます。こうした矛盾を処理する技巧は中国の文化人が考え参考にする価値が大いにあります。このような深い技巧はだいたい、異文化に対応する正しい態度から生み出されています。

中国文化と日本文化の関係から分析するのが一番でしょう。日本の文化史に関して述べたほぼすべての書籍で言及されている、この『日本文化史』でも日本文化における中国の要素については詳しく示されています。新渡戸稲造の『武士道』でも、中国の儒家思想が武士道に及ぼした影響が分析されています。木宮泰彦『日中文化交流史』では中日文化交流の進展し変化する様子が詳しく紹介されています。しかしいかに正しく中日文化の関係を処理するかは、とても複雑な問題です。特に現代は、盲目的に日本の多くのサブカルチャーをおだて上げる人が多いかもしれません。「日本文化の多くは中国から学んだもの」といった類の観点を抱いて暖を取る人たちもいます。

こうした事物の見方は、中日の「茶道」の考え方で簡単に解説するのが一番です。日本の茶道は岡倉天心の『茶の本』にあるように、清潔さ、茶道の前での平等、派手さを捨てたわびさび、一期一会を求めるものです。中国の茶文化に足りないところは『茶の本』のような茶道精神を取り出して扱った著作がないことだと考える人もいます。でも私は、それこそが中国茶道の所在だと思います中国文化は得てして「言外」にこだわり、感覚を求め、文字以外で表そうとします。中国のお茶は飲む人によって飲むときによって異なる心境に重点があり、飲むたびに違うことにこだわりがあります。入れる人によってお茶が異なり、時間の経過に伴って香りが変化することこそ、お茶を飲む人だけが悟れる甘み渋みではないでしょうか。このように、中日の茶道には似たところがあり、いずれも独特な茶を味わう体験を都度大切にしよう求めています。しかし違いもあり、日本の茶道は厳粛で謹直、中国のお茶はロマンチックで奔放です。

日本には茶道があるのに中国にはないという嘆きをよく耳にします。ですが、決して中国に茶道がないのではなく、必ずしも「日本茶道」と合致していないのだと思います。茶道という言葉そのものが日本の茶人に創造されたものであり、中国のお茶の精神で日本の茶道の精神をこじつければ、必ずちぐはぐになります。

日本人が文化上の矛盾を処理する技巧はおおよそ、自民族の文化を信用する心を抱いて、他の民族の文化を知るというものでしょう。日本の先進的な漫画、設計などの具体的な文化を学ぶことより、正しい文化の心を確立することのほうが、今の中国人には差し迫っているかもしれません。

たくさん、ここまでくどくど述べてきましたが、これほど多くの乱れた稚拙な観点をお聞きいただきありがとうございました。私の日本語がこれらの観点を書き出すレベルに遠く及ばないため、ひとまず中国語で表現することしかできず、書式も中国語の手紙形式をとることしかできません。これらが日本語に訳されて貴方の目に触れる日を心から待ち望んでいます。横浜にいるとき、貴方の好きな火鍋を四川でご一緒しようと約束したのは覚えていますか。もし中国に来ることがあったら、是非こちらのいいところを案内させてください。

ついでながら秋の良き日をお喜び申し上げます

中国の友 リン

2019年09月19日

読んだ書籍：家永三郎『日本文化史』、北京、商務印書館、1992年。

参考書籍：

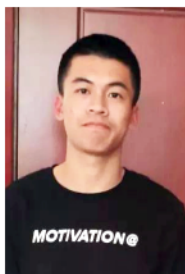
木宮泰彦『日中文化交流史』、北京、商務印書館、1980年。

ルース・ベネディクト『菊と刀』、北京、商務印書館、1990年。

新渡戸稲造『武士道』、北京、商務印書館、1993年。

岡倉天心『茶の本』、北京、新星出版社、2016年。

本分难守



王茂源

南方医科大学 临床医学

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

前段时间，天皇逊位的消息引起了不少风波。终于，上周天皇的继承顺利地进行了下来。在外人眼里，天皇几乎为一虚职，为何能引来那么多关注？读过《菊与刀》，或许能对这个问题的解答有所帮助。

二战结束后，日本战犯大多受到了军事制裁，然而作为明面上的最高指挥者——天皇，并不在此列。这种安排大多是基于美国人的政治权衡。在这场权衡的背后，我们应该要关注到一些事实。《菊与刀》记录到，在对战犯的审问中，几乎没有人认为，天皇需对战争负直接责任；语气重一点的人也只是说“天皇是被蒙蔽了的”。日军对天皇的维护，令人称奇。

不仅日军是这样，对于普通的日本群众，天皇的形象也一样。这种现象与日本“各守本分”的处世方式有关。

《菊与刀》中，作者对日本人的处世方式概括为“各守本分”，确如其词。这种特质其他国家也有，但少有像日本那么极端的：即使是一间小小的寿司店，店主都想子子孙孙有人继承，做好寿司店主长子的本分；即使后辈仅比前辈晚来公司一个月，也要接受前辈的指点、对前辈恭敬，做好后辈的本分；即使公司经营出

了问题、工资在不断下调，员工也不愿意离职出走，要对企业保持忠诚，做好员工的本分……这些是我在其他一些日本作品里发现的一些情节，如果概括为“各守本分”，再合适不过了。里面有些行为我们可以理解，但有些却让人不好理解：员工进入公司是为了谋取生活所需的物质，既然公司的工资都无法保证我的生存，那我为什么还要为它卖命？这种不可理喻来源于文化的差异。日本有自己独特的文化，文化的印记能深烙于人的心中。天皇能在日本人心中占据极其重要的地位，也是如此。在不谈及天皇其他为塑造良好形象的行为下，天皇，就是日本文化的一种象征。

也是来源于文化的差异性，《菊与刀》中，作者把这些“各守本分”的行为当做等级制的产物——对于以“自由、民主”为主要内容的西方文化，这种带有束缚性的特征属于等级制的内容。然而在东亚文化圈中，理解成“旧礼教”可能更合适一点。日本文化受中国影响极大，在数百年间没有明显的断层，也没有像中国文化一样，经历过 1919、1949 年的大改造。封建时代，文化的作用主要偏向于维护统治者的统治，日本文化也如此。“天皇”这一位置的存在，其实可以大致反映出，日本文化中，关于天皇的内容得到了极大的保留。在不同的文化内，都或多或少存在着“君要臣死，臣不得不死”的忠义观，日本也有，我把它归于“旧礼教”上。也是这一种文化基础的支撑，才有了战犯统一“天皇无罪”的口供。

在中国封建文化中，有一句话叫“祖宗之法不可变”。这句话的内容与“各守本分”有本质上的相同点。《菊与刀》中描述的日本也有许多相似的“固执”的例子。天皇提前退位，实际可认为是对祖制的违背，那是否可以说天皇没有守好本分？在新闻发酵的过程中，大家讨论的有实际的天皇的年龄问题，有真假不明的阴谋论、矛盾论，我认为，文化问题应该也是一个关注点。

每个民族都有自己的文化自信。天皇作为日本文化的象征，在行为上已经做出不合“本分”的举动，结合日本文化逐渐受全

全球化的影响，确使日本人产生对文化前景的担忧。那日本文化会衰败吗？

《菊与刀》中，作者认为，“等级制”构成了日本国内基本的人与人、人与国家的关系。若是人与人、人与国家的关系遭到了严重的破坏，日本文化才会完全衰败。不过在我看来，这很难。在接受 100 多年的西化后，日本文化仍呈现其独特性：《菊与刀》所介绍的忠义观始终带有明治维新前的影子；书中描绘的人与人间有距离感的交往关系与如今所知的日本人间的交往关系相差无几。文化交融对日本文化内核的影响有限。而人与国家的关系中最基本的一条，可以表述为：国民推动国家发展，国家保障国民生活。自二战结束以来，日本已经遭受数次经济危机，每次都会对人与国家的关系造成一定冲击。不过日本表现出良好的抗打击能力。

虽然看似形势不差，但日本社会已出现不少暗涌，例如社会老龄化问题、宅现象……所谓“经济基础决定上层建筑”，老龄化问题有很大概率改变日本的经济结构，从而改变社会构造、大幅改变日本文化。“宅文化”的流行，很多人直接甩锅给动漫行业，但我认为，是否也要对“旧礼教”进行反省：美国的动画发展较好，为何没有“宅文化”流行？什么样的外部原因促使日本青年甚至成年人情愿“宅”？“谈资论辈”的传统对年轻人的带来了多大的阻碍……有部分人已经失去了文化的“本分”。

《菊与刀》介绍了太平洋上的一些岛屿，例如汤加和萨摩亚，在过去分有神圣首领和世俗首领。世俗首领是管事的，神圣首领是被供着的。然而外界强有力的文化一进入，当地制度、文化便发生了重构。本分难守，即使抗打击能力极强的日本也一样。日本只要还处于开放状态，世界其他文化对日本文化的作用便不会停止。

本分は守り難し

王茂源

南方医科大学 第一臨床医学院

先日、天皇の譲位のニュースで多くの騒ぎが起きました。先週ついに皇位継承がつつがなく行われました。他人目には、天皇はほとんど名目上の職なのに、なぜそれほど関心を引くのでしょうか。『菊と刀』を読んだことが、もしかするとこの問題の解答にある程度は役立つかもしれません。

第二次世界大戦が終わった後、日本の戦犯は大部分が軍事制裁を受けましたが、表面上の最高指揮者、天皇はそこに含まれませんでした。こうした扱いは大部分がアメリカ人の政治判断に基づいています。この判断の裏には、関心を持つべきいくつかの事実があります。『菊と刀』には戦犯に対する取り調べの中で、天皇が戦争の直接的な責任を負わなければならないと思っている人はほとんどいなかった、語気の少し重い人も「天皇は騙されたのだ」と言うだけだったとの記録があります。日本軍が天皇をかばったことには感心させられます。

日本軍だけではなく、普通の日本の大衆にとっても、天皇のイメージは同じでした。このような現象は日本の「それぞれ本分を守る」処世の方法と関係があります。

『菊と刀』の中で、作者は日本人の処世の方法を「それぞれ本分を守る」と概括していますが、確かに文字通りです。このような特質は他の国にもありますが、日本のように極端なところは多くありません。たとえ小さい寿司屋でも、店主は代々に

継承する人がおり、寿司屋の主を務めるのが長男の本分と
思っている。後輩の入社が先輩より一か月しか遅く
なかったとしても、先輩の指導を受け、先輩を敬い、
後輩の本分を尽くす。たとえ会社が経営問題を起
こし、給料が絶えず下がっても、従業員は退職し
て出ていきたいと願わず、企業への忠誠を維持し、
従業員の本分を尽くす……これらは他のいくつかの
日本の作品の中で見つけたエピソードですが、「それ
ぞれ本分を守る」と概括すると、この上なくしっ
くり来ます。中には理解できる行為もありますが、
一部は理解に苦しみます。従業員は生活に必要な
物質を得るために会社に入るので、会社の給料で
生存を保証できなくなってまで、なぜその会社
のためにまだ命がけで働かなければなら
ないのでしょうか。このような頑迷さは文化の
相違から来ています。日本には自らの独特な文化
があって、文化の烙印は人の心の中に深く押さ
れています。天皇が日本人の心の中できわめて
重要な地位を占めているのも、そのようなこと
です。天皇その他が良いイメージを形作る行為
に言及しない前提で、天皇は日本文化のある種
のシンボルです。

また文化の違いから来ているものでもあります。
『菊と刀』の中で、作者はこれらの「それぞれ本
分を守る」行為を身分制度の産物と見なしてい
ます。「自由、民主」を主な内容とする西洋文
化にとっては、このような束縛性のある特徴は
身分制度の内容に属するものです。しかし東ア
ジア文化圏の中では、「古い礼儀と道徳」と理
解するほうが恐らくもう少し適当です。日本
の文化が受けた中国の影響は極めて大きく、
数百年間に明らかな断層がなくて、中国文
化のように1919年、1949年の大改造を経
験してもいません。封建時代、文化の作用は
主に統治者の統治を守ることに偏っており、
日本の文化もそうでした。「天皇」という地
位の存在は、実のところ、日本の文化の中
で、天皇に関する内容が極めて大きく保
留されていることをおおむね反映し

ています。さまざまな文化で、多かれ少なかれ「君主が臣下に死ねと言えば臣下は死ななければならない」忠義観は見られます。日本にもあり、私はそれを「古い礼儀と道徳」に含めています。またこの種の文化の基礎の支えでもあり、それでこそ戦犯が様に「天皇は無罪だ」と供述したのです。

中国の封建文化には、「祖先の方法は変えられない」という言葉があります。その内容は「それぞれ本分を守る」と本質的に共通点があります。『菊と刀』で述べられている日本には、たくさんの似通った「固執」の例もあります。天皇が早めに退位するのは、実際に歴代の慣例に背いていると考えられますが、それでは天皇は本分を守れていないと言えるでしょうか。ニュースが変化していく過程で、討論されていたのは実際的な天皇の年齢の問題で、真偽不明な陰謀論、矛盾論もありました。文化の問題も注目すべき点だと思います。

おのこの民族は自らの文化に自信を持っています。天皇は日本文化の象徴として、行為の上ではすでに「本分」に合わない挙動をしており、日本文化が次第にグローバル化の影響を受けてきたことと結び付けると、確かに日本人は文化の将来性に対する心配を生じます。では日本文化は衰えるでしょうか。

『菊と刀』の中で、作者は「等級制」が日本国内の基本的な人と人、人と国の関係を構成していると考えています。もし人と人、人と国の関係が深刻な破壊に遭ったら、日本の文化は完全に衰えるでしょう。しかしその可能性は低いと思います。

100年余りの西洋化を受けてなお、日本文化にはその独特性が現れています。『菊と刀』が紹介している忠義観は明治維新前の影をずっと持っています。描写されている人と人の距離感ある交際関係は、こんにち知られている日本人の対人関係と大して違いがありません。文化がとけ合うことによる日本文化の核心への影響は限られています。人と国の関係で最も基本的なもの

は、国民は国の発展を推進し、国は国民の生活を保障すると表現できます。第二次世界大戦が終わってから、日本ではすでに数回の経済危機があり、人と国の関係に一定の衝撃を受けてきました。しかし日本は優れた抵抗力を見せたのです。

情勢は見たところ悪くないようですが、日本社会はすでに水面下で揺れ動いています。高齢化問題、オタク現象……いわゆる「経済的土台が上部構造を決定する」話で、高齢化問題はかなりの確率で日本の経済構造を変え、それによって社会の構造が変わり、日本文化も大幅に変わります。「オタク文化」の流行を、多くの方は直接アニメ業界のせいにしてしていますが、「古い礼儀と道徳」の反省をするべきではないかと思います。米国のアニメもわりと発展しているのに、どうして「オタク文化」が流行していないのでしょうか。日本の青年にひいては大人が「オタク」を心から願うのを促す外部要因とは何でしょうか。「年功序列」の伝統が若い人にもたらした多大な障害……一部の人はすでに文化の「本分」を失っています。

『菊と刀』は太平洋の上のいくつかの島を紹介しています。たとえばトンガとサモアは、かつては神聖な首領と世俗の首領がそれぞれいました。世俗の首領は管理者で、神聖な首領はお飾りでした。しかし外部の強力な文化が入ると、現地の制度、文化に再構造が発生しました。本分は守り難し。抵抗力の極めて強い日本でもそうです。日本はまた開かれた状態にさえなれば、世界の他の文化の日本文化に対する効果が停止することはありません。

美到极致的哀伤

鲍芝瑾

东北师范大学 汉语言文学（非师）
笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

“在看花吗？”

“是。”

“为什么不去花园呢？万紫千红，百花齐放。”

“因为一朵花比一百朵花更美丽。”

一位清瘦的老人，眼睛亮如初夏的星辰，若有若无地弯着嘴角。那是来自上个世纪的一张照片，而我总是会被这样的一张照片打动。川端康成，是我所了解到的最温柔的孤独与悲愁。

他的作品，每一个文字都是一只蝴蝶，扇动着绝美的翅膀，把悲伤刻在人的心上。《北国》的雪，是驹子，是叶子，是“往昔徒然空消逝”的终极的空虚；洁白的《千只鹤》，是雪子，是文子，是飘渺没有尽头的纠缠不清的爱；《古都》的枫叶，是“泪眼描将尽，愁肠写未出”的千重子的哀怨，是飘着细雪的清晨里苗子转身离开的背影，是川端康成成为日本传统文化发出的最后的呻吟……川端康成，把日本的物哀写到极致，他用世界上最细腻的笔触，将病态的心理描写的那样让人心动，让人心碎。阅读他的文字，不是走进一个故事，而是走进一个人的心里，你不知不觉中就屏住了呼吸，听他说，然后情不自禁地泪流满面。听着每本书里的每一个人讲着他的故事，讲着他的那一份担心，苦恼与无可奈何，好像一瞬间又看不到希望，一股孤独、一丝徒劳变成你心底绕梁三日的余音。你无法责怪故事中的人物，尽管在现实世界中你绝

不会原谅一个出轨的男人，不会理解一个为爱失去自尊自爱的女人，无法喜欢上一个对自己一无所知的人……但在他的书中，你渐渐学会去理解，你开始心痛于他们所有的“不正常”，你开始明白原来这些病态其实只是童年悲伤和生活无奈的产物，每个人都是受害者，没有人可以当漏网之鱼。然后一遍又一遍地阅读之后你发现我们所有人都是这样，在爱情和生活中，无论相爱与否，勇敢与否，最初的热情总会在一些看不明的犹豫中渐渐变成失望，然后退缩，最后放弃。这是川端康成文字中的哀伤，美得让人窒息，让人痛得甘之如饴。

所以这样悲伤的天才在最后选择了结自己的生命，他一言不发，与这个世界告别。“自杀而无遗书，是最好不过的了。无言的死，就是无限的活。”他在四十多岁的时候这样说，在七十多岁的时候这样做。而现在的我只要读到他的作品，总会想起一双深邃的眸子，安静地看着一朵花在黑夜中沉默地开放着。然后他会问我这样的一朵花美不美，用一种没有声音的方式。

可能这就是日本传统文学最经典的代表吧，《花未眠》里他写“凌晨三四点，发现海棠花未眠”。那么细致，那么温柔，但又那么悲伤。如果一个人，不是孤独到了极致，又怎么会在凌晨三四点一人清醒，又怎么会为一朵海棠的未眠而感动？读川端康成，我看到了日本在经济高速发展的外表下深重的悲伤，这种悲伤是不可抗拒的，而这样的悲哀来源于他们在现实社会中日渐迷失，日复一日的工作，肩负着一个家庭乃至一个家族的重担。日本人在忙碌中忘记了自己的归宿，而川端康成这样的人努力地呼喊，希望人们能够回头看看被遗忘已久的日本传统文化，希望二战之后人们可以在向西方学习的同时也不要忘记自己所生长的土壤。然而川端的文字虽然细腻，却并未像《源氏物语》那样通过大量和歌的插叙诗化景致、升华意境，更不同于三岛由纪夫通过对人物思想不断的强调和表达来提炼情感，而是大程度的依靠对景和物的描写来寄托升华小说的主题和人物的心情。川端康成的小说

虽然也极力写日本的“物哀”，但又与太宰治的文学作品有本质的区别。他的故事有一种西方文学所无法传达的细腻之感，总是能通过一个个静处的细节掀起意识与感情的狂澜。不过阅读完毕，哀伤和隐匿的波澜慢慢解构以后，一种留有浓厚佛教和现代西哲的印记往往也会显现出来。我想这就是川端康成文学的不同之处，他总是在一开始就给你希望，整个作品都透出纯真，自然的美，但每一分这样的美都伴随着一分无奈，一分失望，最终一切都变得徒然，变成主人公抱着遗憾的无可奈何。

我通过阅读川端康成来体会写字楼，繁华都市之外的日本，跟着他的文字，走进日本的乡村，走进日本的山区，看日本的雪和枫叶，与一个又一个孤独的人谈心。我从他的文学里看到一个充满失望却仍富有生气的日本：虽然生活很苦很累，虽然人生不如意十之八九，但生活中始终有美好的存在，也许是一朵悄然盛放的花，也许是一个少女的回眸一笑，也许是一只洁白的千只鹤……我开始用一种包容的眼光去看待一个社会，一个民族的寂寞，试着把这份寂寞看做一种文化，渐渐去了解日本的死亡文学。我在许多次阅读后终于理解了为什么川端康成会在最后选择了结自己的生命，就像村上春树写的那样“死不是生的对立面，而作为生的一部分永存”。在日本文化中，有一种直面死亡的禅意，要么是极致的繁花似锦，要么是永恒的寂静无言。大和民族的美学传统就是追逐极致，两个极端，非此即彼。而不论是物哀还是死亡美学，就如同奥修说的那样，是一种武士道精神在文学上的表现。这种得道，就是当一个人时时刻刻准备好了死去，那么他就彻底拥抱了活着的每一秒。

“花未眠吗？”

“是。”

“那你呢？”

“我是那个不眠的人。”

美の極致の哀悼

鮑芝瑾

東北師範大学 漢字言文学

「花を見ているの？」

「ええ」

「どうして花園に行かないの？いろいろな花が咲き乱れていますよ」

「一輪の花のほうが美しいからですよ」

ほっそりした老人の目は初夏の星のように明るく見え、口もととは心なし曲がっています。それは前世紀から来た写真で、私はいつもこうした写真に感動しています。川端康成は、私の知る最もやさしい孤独、悲しみです。

彼の作品は、すべての文字がチョウさながら、美しすぎる翅をひらひらさせ、悲しみを人の心に刻んでいます。『北国』の雪、駒子、葉子の究極の空白。『千羽鶴』のゆき子、文子のぼんやりして果てしがたいもつれた愛情。『古都』の楓、にぬれた目を模写して、憂える心は書かない」千重子の悲しみと恨み、雪のちらつく明け方に去って行く苗子の後ろ姿。川端康成が日本の伝統文化のために出した最後の呻き……川端康成はもののあはれを極致まで描き、世界一こまやかな筆致で病的状態の心理を描写しており、読むと心が動き胸が張り裂けます。彼の文を読むのは物語ではなく一人の心に入っていく体験で、いつの間にか息を止めて彼の話に聞き入り、そして感情を抑えきれなくなり涙がほろほろと流れます。各作品の人物が各人の物語、心配、

悩み、なすすべのなさを語り、一瞬たりとも希望が見えず、一筋の孤独と徒労感だけが心の底で余韻を留めるかのようです。作中の人物を咎めることはできません。現実世界では決して常軌を逸した男を許さず、愛のため自尊心や自己愛を失う女を理解できず、自分が何も知らない人が好きになれなくても……彼の作品の中で次第に理解し、彼らのすべての「不正常」を気に病み始めて、これらの病的状態が実は少年時代の悲しみと生活のひどさの産物だったこと、誰もが被害者で、悪人ではないことを理解し出します。それから読むたび誰もがそうなのだということに気づくのです。愛情と生活の中で、愛し合っているか、勇敢かに関わらず、最初の情熱はぼやけたためらいの中でだんだんなる失望に変わり、萎縮して、最後には放棄してしまうことに。川端作品の中の哀悼は、窒息するほど美しく、甘やかなほど痛いのです。

だからこれほどの悲しみの天才は最後に自分の生命にけりをつけることを選び、ひと言も言わず、この世界と別れを告げたのです。「自殺とすれば、遺書のないのがいい。無言の死は無限の言葉である」彼は四十代でそう話しており、七十代でそのとおりにしました。今の私は彼の作品を読むだけで、いつも奥まったその双眸がやみ夜の中で沈黙して開く一輪の花を静かに見ている光景を想起します。それから、一輪の花は美しいか否かと声なく私に問いかけてきます。

恐らくこれは日本の伝統文学の最もすばらしい代表でしょう、『花は眠らない』で彼は「夜なかの四時に目がさめた。海棠の花は眠っていなかった」と書いています。これほどこまやかでやさしく、しかしこれほど悲しいのです。孤独の極致にいたのでなかったら、夜なかの四時に目を覚まし、また海棠の花が眠っていないことに感動したでしょうか。川端作品を読んで、私には日本の経済が急発展する内側で抱えた深刻な悲しみが見

えました。このような悲しみは阻むことができず、またその根源を現実社会の中で日に日に見失いながら、彼らは家庭や親族を背負って日々の仕事をしているのです。日本人は忙しさの中で自分の落ち着き先を忘れ、しかし川端康成のような人が努めて、人々が忘れられてすでに長い日本の伝統文化を振りかえってほしい、戦後の人々が西洋から学ぶのと同時に自分の成長した土壌を忘れないでほしいと叫びをあげました。しかし川端の言葉はこまやかではあるものの、『源氏物語』のように大量の和歌の挿入を通じて景色を詩に変え、昇華させてはおらず、三島由紀夫とは違い人物の思想を絶え間なく強調し表現することを通じて感情を引き出すこともなく、かなりの程度で景色や物の描写を抛り所に小説のテーマと人物の心情を昇華させています。川端康成の小説は極力日本の「もののあはれ」を書いています。太宰治の文学作品とは本質的な違いがあります。彼の物語には西洋文学では伝えようのないこまやかさがあり、みな静かな場の細部を通じて意識と感情の荒波を巻き起こすことができます。しかし読み終わると、悲しみと隠れた波瀾がゆっくりと解けてから、ある種の濃厚な仏教と近代西洋哲学の痕跡もはっきりと現れてくるのです。私はこれが川端康成の文学の違うところだと思っています。彼はいつも最初に希望を与え、作品全体から純真、自然な美が透けて見えますが、その美にはなすすべのなさ、失望が伴っており、最終的にはすべてむだになって、主人公になって残念な思いを抱きどうしようもなくなってしまいます。

私は川端康成を読むことを通じて、オフィスビルやにぎやかな都市の外の日本を体得しました。彼の言葉について日本の田舎、山間に入って、日本の雪と紅葉を見て、一人また一人の孤独な人と心を打ち明けて話をしました。私には彼の文学の中から失望に満ちてなお活気に富んでいる日本が見えます。生活は

とても苦しく疲れるものでも、人生の十中八九が不本意でも、生活の中にずっとすばらしい存在があります。ひっそりと咲く花かもしれませんし、視線を転じて笑う少女かも、真っ白い千羽鶴かもしれません。私は寛容な眼差しである社会、民族の寂しさを評価し始めました。この寂しさを一種の文化とみなして、日本の死の文学を次第に理解していこうとしています。何度も読んでやっと、川端康成がなぜ最後に自分の生命にけりをつけることを選んだのか理解できました。村上春樹が書くように、「死は生の対立面ではなく、生的一部分を永久に存在させるもの」なのです。日本の文化の中にはある種の死に向かい合う禅の趣があって、あるいは花が咲き乱れる極致で、あるいは永久不変な静寂と無言です。大和民族の美学の伝統は、極致を追求し、両極端で、こちらでなければあちらなのです。もののあはれにせよ、死の美学にせよ、奥修の言うように、武士道精神の文学における表現の一種です。こうした道義は、一個人がいつも死の準備をすることであり、彼は生きている一秒一秒を徹底的に受け入れたのでした。

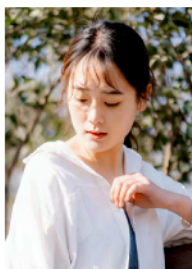
「花は眠っていないの？」

「ええ」

「貴方は？」

「私がその眠らない人です」

一枕纸书



王咏雪
聊城大学

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

随便翻翻，可消永夜。——来自《枕草子》的“小确幸”

初读《枕草子》总使我想起张岱在《自为墓志铭》中所写的“少为纨绔子弟，极爱繁华，好精舍，好美婢，好变童，好鲜衣，好美食，好骏马，好华灯，好烟火，好梨园，好鼓吹，好古董，好花鸟，兼以茶淫橘虐，书蠹诗魔，劳碌半生，皆成梦幻。”这虽是墓志铭，虽然看起来又有些玩世不恭，但他的生活情趣和他对生活的享受，不禁让我赞叹。不同时代，不同背景，在《枕草子》中，我却是一眼看到了四时景色、弦乐对诗、山川湖海林，作者对生活的小得意、小感动、小牢骚、小抱怨。清少纳言仿佛是一个懂得生活各方面享乐的杂学家，又或者是一位生活美学家，虽然有时又觉得她写的尽是琐事，但偶尔想想，又便觉得她是兴之所至，漫然书之。

在村上春树的随笔《兰格汉斯岛的午后》中提到过一词“小确幸”，意指生活中“微小但确切的幸福与满足”。尽管《枕草子》是一篇随笔文学，但在清少纳言的所见、所感、所想中，《枕草子》又是这样一种“小确幸”：能赏一年四季最好的景色、游玩最妙的山、去逛最好的市集、去看最好的海以及妙解唐诗、散步闲聊、

说悄悄话、徘徊期待却迟迟不来而如期而至的定子的挂念，一封久盼迟来的信，一场收麦盛景……《枕草子》的书评中，有一句写的特别好“随意翻翻，可消永夜”，平安时代的小日记，平安朝的宫廷小生活，只是览书便能活灵活现的想象在眼前，让我穿越时空看到别样的日本，以及在那个时代的喜怒哀乐，让我沉醉于它所描绘的日本古代宫廷贵族画卷之中。

兰省花时铺账，草庵谁相寻？——去往《枕草子》所描绘的平安朝五月时节，漫步山里；七月夜晚，拂晓赏残月；九月时分，破晓观露赏花。在平安这个处处和歌，读经的时代，让我念起那个一衣带水的唐朝。

唐朝，从贞观之治再到开元盛世，无论是宗教书法还是诗词歌赋都到达了那个时代的尖峰。在那时，中日友好交往和经济文化交流也一并出现了空前的盛况。从 630 年日本派出第一批“遣唐使”赴中国，再到后来的“鉴真东渡”，中间有不少日本留学生、学问僧，长期在中国学习和研究各种专门知识。而正是通过这些交流，日本在平安时期经济文化、宗教风俗等方面都流露出唐朝的影子。

日本民族是世界上公认的善于模仿的民族，而据说那时“遣唐使”回国后，同时代的平安朝参照唐制、仿照长安城建造奈良都城，唐风特甚，成为一股热潮。在《枕草子》中，也是处处能见“大唐的织锦”、“锦缎制的唐衣”、“唐朝屏风”、“唐朝样式的新柜子”、“唐朝的舞蹈”、“大唐君主的故事”……

中国进入唐朝以后，唐诗盛行一时，而同期处于平安朝的日本在文学创作上也深受唐诗的影响。“白樂天の詩に「香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル」とあるからだつた。”在文中“香炉峰的雪”的一段里，描述了这样一件事情：在下雪的一天，宫女们早早拉下帘子，围着火炉在一起闲谈，皇后这时问道：“少纳言啊，香炉峰的雪怎么样了？”清少纳言立刻心领神会，把帘子高高地卷了起来。虽说故事简单，却是把白居易的诗《香炉峰下新卜山居草堂初成

偶题东壁五首》之四的：“日高睡足犹慵起，小阁重衾不怕寒。遗爱寺钟献枕听，香炉峰雪拨帘看。”运用到了生活中去了。而在《枕草子》的“草庵”这一段中，又有另外一个小故事，藤原齐信寄来的信上让清少纳言写出“兰省花时锦帐下”的下一句，少纳言则回道“草庵谁相寻？”白居易有一首诗《庐山草堂夜雨独宿寄牛二李七庾三十二员外》：“丹霞携手三君子，白发垂头一病翁。兰省花时锦帐下，庐山夜雨草庵中。”而少纳言恰巧把后两句改写成了诗歌，却把她独自一人在草庵的孤独意境表达了出来。还有“开花的树”这一段里，在描写梨花时，又引用了“梨花一枝春带雨”来形容梨花的美……

清少纳言把《枕草子》和当时作为社会主流的汉文学完美结合，又把唐诗运用的极其巧妙，这不仅显示出了清少纳言的学识，而且展现出来了平安朝贵族教育对汉文学的重视，和唐文化在当时的盛行。

一衣带水，一苇可航。——在《枕草子》中重新认识中日文学交流

宫廷贵族处处和歌，擅长作诗的人又极受尊重，这些都要追溯到《万叶集》的编写。深受汉诗的影响，据说编写《万叶集》时，盛行汉学和汉诗文，许多万叶歌人都兼做汉诗。而最初，《万叶集》的目的只是作为教养书，供皇子、皇女阅读。一个世纪后，才发展到只有宫廷贵族才能受到良好教育，那么平安宫中处处和歌便可想而知了。

中国文化对日本有影响，日本文化中也有有别于中国文化的独特地方，或许，日本和中国，正是因为“一衣带水”，隔海相望，舟船往来，互通有无，才留下了如此深切的文化血脉。日本文化虽然可以说起源于中国，但是在《枕草子》中，我却发现，日本早已将那巨大的中国文化消化，形成了洋溢着大和民族精神的日本文化。

文化在进步、思想在进步、文学思潮纷呈，多样化，个性化，也是在进步。所以为了擦出中日共同发展的火花，中日文化交流也理当更进一步。

阅读书目：

《枕草子》上海三联书店，2016年7月版，著者（日本）清少纳言，译者陈美锦

参考文献：

《日本文化探究》中国文史出版社，2014年1月版，作者吴松芝、刘梅君、董江洪

《白居易诗歌在日本古典文学中的体现》文学教育（上），2018年11月28日版，作者张明铭

《日本史话》广西师范大学出版社，2006年8月版，作者汪公纪

《〈枕草子〉浅说》外国问题研究，1987年4月2日版，作者赵小柏

本を枕に

王咏雪

聊城大学 日本語専攻

気軽にめくれば、長い夜をすごせます。——『枕草子』から来る「小確幸」

初めて『枕草子』を読んだとき思い出したのは張岱が『自為墓誌銘』で書いた「若い頃は金持ちのどら息子で、繁華を愛し、凝った作りの住居、美しい下女、稚児、美しい衣服、美食、駿馬、華やかな灯火、祖先の祭祀、演劇、吹聴、骨董、花鳥を好み、お茶と将棋を愛好し、本の虫で、あくせく苦勞する半生、すべて夢まぼろしになった」です。これは墓誌銘で、また多少世間をなめていて不遜なところもありますが、彼の生活の情趣と彼の生活に対する楽しみには、思わず賛嘆させられました。時代も背景も異なる『枕草子』の中で目にしたのは、四季の景色、弦楽と詩のやりとり、山、川、湖、海、林で、作者の生活に対する小さな満足、小さな感動、小さな不満、小さな恨み言でした。清少納言はまるで生活の各面の楽しみが分かる雑学家、あるいは生活の美学家です。こまごましたことばかり書いているなど感じるときもありますが、しかしたまに考えてみると、彼女はふと興味を持ったものを漫然と書いたように感じます。

村上春樹の随筆『ランゲルハンス島の午後』に「小確幸」という言葉が出て来ますが、「人生における小さくはあるが確固とした幸せのひとつ」を指します。『枕草子』は随筆文学ですが、清少納言が見て、感じて、考えたことの中で、『枕草子』もまた

ある種の「小確幸」です。年中最も良い景色を觀賞し、最もみごとな山に遊び、最も良い市をぶらつき、最も良い海を見に行き、みごとに唐詩を解釈し、散歩して雑談し、内緒話をして、うろうろして約束通りに来ない定子の心配、待ち望んでいた手紙、麦を収穫するにぎやかな景色……『枕草子』の書評の中で、「気の向くままにめくれば、長い夜をすごせる」は特に良く書かれています。平安時代の小さな日記、平安朝の宮廷でのささやかな生活が、本を見るだけで生き生きと想像でき、時空を通り抜けて違う日本、その時代の喜怒哀楽を見られるので、描かれている日本古代の宮廷の貴族の絵巻に酔いしれてしまいます。

蘭省の花の時、錦帳の下、廬山の雨の夜、草庵の中——『枕草子』が描く平安朝へ

五月は山里をそぞろ歩きし、七月は夜明けに残月を鑑賞し、九月には明け方に露と花を鑑賞。平安という至る所に和歌、読経のある時代は、その一衣帯水の唐を思わせます。

唐は、貞観の治から開元年間まで宗教、書道、詩歌すべてがその時代の頂点にありました。当時、中日の友好的な往来と経済文化交流にも前例のない盛況が現れました。630年に日本から第一陣の「遣唐使」が中国に派遣され、その後の「鑑真東渡」に至るまでの間、多くの日本の留学生、学問僧が、長期にわたり中国で各種の専門知識を学び研究していました。これらの交流により、日本は平安時代の経済文化、宗教の風習などの面いづれにも唐の影が見られるのです。

日本民族は世界で公認されている模倣に優れた民族で、その時「遣唐使」が帰国した後に、同時代の平安朝は唐制を参照し、長安城をまねて奈良の都を築いて、唐風が非常に流行したそうです。『枕草子』中の至る所に「唐錦」、「錦の唐衣」、「唐絵の屏風」、「唐様の厨子」、「唐の舞ひ」、「唐土の帝」の話……

中国が唐の時代に入った後、唐詩が一時に盛んになり、同時

期に平安朝だった日本は文学の創作面でも唐詩の影響を深く受けました。「白楽天の詩に『香炉峰ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル』とあるからだ。」文中「香炉峰の雪」のくだりで、このような話が述べられています。ある雪の日、女官たちが早くから御格子を下ろしたまま、火鉢を囲んで雑談していたとき。中宮が「少納言よ、香炉峰の雪はどんなであろうか」と問うたので、清少納言はすぐにピンときてとっさに御簾を高く上げました。流れは簡単なものですが、白居易の詩「香炉峰下、新たに山居をトし草堂初めて成り、偶東壁に題する五首」の四首め、「日高く睡り足りて猶ほ起くるに慵し、小閣に衾を重ねて寒さを恐れず。遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴き、香炉峰の雪は簾を撥げて看る」をふまえた行動でした。また『枕草子』の「頭の中將のすずるなるそら言を聞ききて」で始まるくだりにも別の話があります。藤原斉信から来た手紙で清少納言は「蘭省の花の時、錦帳の下」の下の句を問われ、「草の庵をたれかたづねむ」と答えています。これも白居易の詩、「廬山草堂に夜雨やう独り宿し、牛二李七庾三十二員外に寄す」の「丹霄に手を攜ふ三君子、白髪頭に垂る一病翁。蘭省の花の時、錦帳の下、廬山の雨の夜、草庵の中」をふまえています。彼女は後半の二句をうまく和歌に書き換え、独りで草庵にいる孤独な境地を表現しました。さらに「木の花は、」で始まるくだりで、梨の花を描写したときにも、「梨花一枝、春、雨を帯びたり」を引用して美しさを形容しています。

清少納言は『枕草子』を当時は社会の主流だった漢文学と完璧に結合させ、また唐詩の運用がきわめて巧みで、このことは彼女の学識を示すだけでなく、平安朝の貴族教育で漢文学が重視されていたことと、唐の文化が当時は盛んだったことが現れています。

一衣帯水、一葦航るべし——『枕草子』の中で中日文学交流を再認識

宮廷の貴族は至る所で和歌を詠み、また詩作に優れている人はきわめて尊重されていました。いずれも『万葉集』の編纂まで遡れることです。漢詩の影響を深く受けており、『万葉集』の編纂時、漢学と漢詩文が盛んで、多くの万葉歌人が漢詩も作っています。当初、『万葉集』の目的はただの教養の本で、皇子、皇女が読むためのものでした。一世紀後にやっと宮廷の貴族だけ良好な教育を受けられるように発展して、宮中の至る所で和歌が詠まれるようになったのは考えてみると分かります。

中国文化が日本に影響しても、日本文化には中国文化と別の独特なところもあります。もしかすると、日本と中国は「一衣帯水」のため、海を挟んで眺めあい、船の往来があって、ないものを融通し合って、やっとこのように深い文化の血統が残ったのかもしれませんが。日本の文化は中国に起源すると言えるものの、私は『枕草子』の中で、日本は早くにその巨大な中国文化を消化して、大和民族精神にあふれる日本文化を形成したということに気づきました。

文化が進歩し、思想が進歩しつつあり、文学の思潮が続々と現れ、多様化、個性化も進歩しています。だから中日が共に発展する火花を出すため、中日の文化交流も当然さらに進めるべきです。

読んだ書籍：

清少納言『枕草子』、陳美錦（訳）、上海三聯書店、2016年7月版

参考文献

呉松芝、劉梅君、董江洪『日本文化探究』中国文史出版社、2014年1月版

張明銘「白居易詩歌在日本古典文学中的体现」文学教育（上）、2018年11月28日版

汪公紀『日本史話』、広西師範大学出版社、2006年8月版

趙小柏『『枕草子』浅説』、外国問題研究、1987年4月2日版

悲悯之花，只是无奈飘零

——读《无缘社会》有感

李岱霖

东北师范大学 财政学

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

无缘社会，“无缘”是没有关联、各不相干的意思。

个人、家庭、社会，本应是微观宏观交错衍生，层层依叠且赖以维持。然而，人与人的疏远、家庭内部的分裂、人与社会的脱节，甚至无缘地终了死去，已经成为日本社会寻常之事。

读罢《无缘社会》，心中景象，如狂风过后，落红一地。悲悯之花，只是无奈飘零。

一、时代进程的狂风

我想归根到底，应从那些风说起。

日本的社会经济进程，起落似海岸的潮汐，波荡之后，人心变迁。而每一次变迁，都是一阵风，一切都是风的因果。

战后的东亚并未归于平静，日本因其工业基础与地理优势，成为入朝美军的大后方。旧帝国臣民的狂妄信仰已经破碎，但这不妨碍其成为工业复兴的中流砥柱。

十年光阴，经济复兴之风，让日本重回轨道。此时的日本，个人、家庭、社会关系紧密，上一代人所秉持的家庭伦理的传统仍然是社会的主流氛围。

七十年代起，日本进入腾飞与泡沫时期。许多人至今仍怀念，资本的逐利灯红酒绿，欲望的膨胀纸醉金迷。工业化与外向经济的发展，让一个资本化集约化分工化的现代日本社会真正成型。

广场协定后，资本市场直走高位，经济泡沫急剧扩张。

这阵风掠过，一代人已经开始变化。此时的日本，工作应酬、通宵达旦、奢侈消费成为社会主旋律，人与人的距离开始疏远，家庭内的隔阂也不断加深。少有工薪阶层去顾虑身体的健康、陪伴家人的时间，因为出卖这两样东西能换来的，是乘数效应下的金钱，无形等级制度中的地位，繁华地段的居室，奢侈的消费，以及资本主导下的异化的心。

泡沫自有破灭之时。九十年代，伴随昭和平成的时代更替，宏观经济开始崩塌。曾经的奢靡物质与虚妄资本一夜之间灰飞烟灭。

这阵风后，便是失去的十年、失去的二十年。时代进程依然持续，经济的困境不会令一个国家停下脚步。各种新生事物不断出现，千禧之年后日本又相继经历了国内右翼情绪重燃、次贷危机的冲击以及“十年九相”的政治轮回。

苍生，一个个普通人、一代代普通人。在经历过战争的创伤、复兴的希望、泡沫的奢靡、崩塌的萧条后，会是怎样？个体在时代环境的力量下，终究是沧海一粟，只觉无力。眼前，低欲望社会、少子老龄化、社会阶级固化、空前的城市化、终身雇佣制的没落、就业萧条等等因素让人们无限怀念“泡沫之美”的同时，也最终导致了无缘社会。落花并不想飘零，无奈风已掠过。

二、悲悯之花，无奈飘零

提到日本的精神审美，会想到什么？

物哀景致中的感触于物、性情流露；幽玄神隐中的超然意境、心神相通；侘寂境界中的万物无常、涅槃寂静……这一切都敏感细致，留有韵味，这一切让人感到美与善意，这里应是一个温暖细腻、珍视此生的此岸。

但如今，不用说像物哀幽玄等精神之美的追求，连丧葬之事中人与人间最基本的悲悯，都难以奢求。一年中数以万计的无缘死者们，或因年轻时拼命工作与暴躁情绪、或因金钱往来中的瓜葛、或因怀才不遇执念未达的不忿，辛劳苦寂度过余生，亲人疏远、

爱人离去、子女反目，空空荡荡无人在意地，在某一个时刻，终了此生。离开时，快餐面的热气还在升腾，离开后，甚至没有一个悲悯的亲人或朋友，去安置他的骨灰。人心之中的悲悯之花，就如此飘落一地。一切皆是无奈：

萧条时期，根本找不到合适工作的失业汉，选择救济金，就等于放弃内心最深处的尊严，所以宁愿在寒风凛冽的街道上过夜，也不想让人知道自己如此不堪；

年近古稀的劳务派遣工人，拼命赶工，不忘给已故双亲添点香纸，钢筋森林中的廉价公寓里，自己突然离去后却无人收尸；

泡沫经济时无暇顾及身体和家庭的裁退会社员，儿女排斥，妻子远去，有谁会接受这位依赖退休金的老人，以及他的后事；

摩肩接踵的都市，被事业挫折与人际窘境击垮的家里蹲，依靠着孱弱父亲的养老金度日，甚至隐瞒老人的死亡，只为继续领用救济的铜钿；

壮丽城市化进程中，无法和儿女融洽生活的老人，被迫回到人烟稀少的乡下，带着抑郁和孤独，等待着自己的最后时刻；

他们大都将无缘地死去。无人知晓，无人祭奠，连最后奢求的墓地，也只来于信仰功不唐捐的僧侣。当他们的灵魂归于彼岸，尘世间的时代洪流依旧奔涌不止，无缘、无关、亦无挂碍。

得不到悲悯的苍生，如此不堪。但谁又能抵挡时代的自然进程？风阵阵吹过，悲悯之花无奈地飘零一地。

三、结语

横看成岭侧成峰。读懂一个国家，难。

国家是多元多维因素组成的有机体，三言两语说清，谈何容易。这篇文章，仅能说是单一角度的“知”，不敢妄称“懂”。

社会现象如国家的倒影。将视角转回国内，不难发现，无缘社会的某些表征也渐渐显露。同属东亚文化圈，同样经历过经济腾飞与放缓着陆的中国与日本，倒影似乎也会有重合之处。而对于特殊国情下改革深水期的中国，“无缘社会”现象也更具有深刻

的研究意义。

最终，时代进程的产物也只有时间去评判是非。望着无奈飘零的花瓣，慨叹感伤之余，不妨停下脚步瞭望，或许远处还有花开？

阅读图书：

《无缘社会》[日]NHK特别节目录制组[著].高培明[译].上海译文出版社

【日本語訳】

哀れみの花は枯れ落ちるのみ 『無縁社会』を読んで

李岱霖

東北師範大学財政学

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等賞

無縁社会の「無縁」とは、関連しない、それぞれ関係がないという意味です。

個人、家庭、社会はもともとミクロ、マクロで入り組み発展しながら変化し、幾重にも積み重なることによって維持されるべきものです。しかし、人と人が疎遠になる、家庭内部が分裂、人と社会のつながりが切れる、さらには孤独死までが、すでに日本社会で普通のことになっています。

『無縁社会』を読んだ心の中の光景は、風の荒れ狂ったあと、地面に落ちた花びらのようです。哀れみの花は枯れ落ちるのみ。

一、時代の荒れ狂う風

私は結局、その風から話そうと思います。

日本の社会経済の過程は、海岸の潮汐のように上下し、波打った後に、人の心が変遷しています。変遷はすべて一陣の風で、いずれも風の因果です。

戦後の東アジアが決してまだ落ち着いていないうちに、日本はその工業の基礎と地理的優位のため、朝鮮に入る米軍の銃後になりました。旧帝国の臣民の高慢な信仰はすでに粉碎されていましたが、工業の復興の大黒柱になる妨げにはなりません。

10年の時間は、経済の復興の風で、日本を軌道に戻しました。この時の日本は、個人、家庭、社会の関係が緊密で、上の世代の人が維持する家庭の倫理の伝統が依然として社会の主流の雰囲気でした。

70年代から、日本はテークオフとバブルの時期に入りました。多くの人が今なお懐かしむ、資本の利益追求は贅沢、享樂的で、欲求の膨張は贅沢三昧でした。工業化と輸出経済の発展により、資本化、集約化、分業化された現代日本社会が形を成しました。プラザ合意の後、資本市場はずっと高位を進み、経済バブルが急激に拡張しました。

この突風がさっと過ぎ、一世代の人はすでに変化を始めていました。この時の日本では、仕事の接待、贅沢な消費、徹夜が社会の主旋律になって、人と人の距離が疎遠になり始め、家庭の内の隔たりも絶えず深まりました。体の健康、家族との時間に気を遣うサラリーマン階級は少なく、乗数効果で産まれた金銭、無形の等級制度の中の地位、にぎやかな地域の住居、贅沢な消費、そして資本の主導により異化する心と引き替えでした。バブルはおのずと弾ける時が来ます。90年代、昭和が平成に交替すると、マクロ経済が崩壊を始めました。かつての贅沢三昧な物質と偽りの資本は一晚の間に跡形もなく消えました。

この風の後が、失われた10年、失われた20年です。時代はなお進んでおり、経済の苦境でこの国の足どりが止まりはしませんでした。各種の新しい事物が絶えず現れ、ミレニアムの年から日本ではまた次々と国内右翼ムードが再燃して、サブプライム危機の衝撃があり、「10年で首相9人」の政権交代もありました。

庶民、すべての一般人、各世代の一般人は、戦争の傷、復興の希望、バブルの贅沢三昧、その崩壊による不景気を経験した後、どのようになったのでしょうか。個人は時代環境の力の下で、

結局は大海の中の一粒の粟で、無力さを感じるばかりでした。目の前にある低欲望社会、少子高齢化、社会階級の固定化、前例のない都市化、終身雇用制の没落、就職氷河期といった要素により、人々が限りなく「バブルの美」を懐かしむと同時に、結果として無縁社会を招いたのです。落ちた花は枯れ落ちたくなくとも、風はすでに過ぎたのです。

二、哀れみの花は枯れ落ちる

日本の精神の審美に言及するとき、何を思い付くでしょうか。もののあはれでの景色や物に触れた感動、にじみ出る性質。幽玄な神隠しでの超然とした境地、気持ちの通じ合い。わびさびの境地での万物無常、涅槃の静寂……そのすべてが敏感で緻密、趣を残し、美と善意を感じさせ、日本は温かでこまやかな、命を大事にする此岸のはずです。

しかし今やもののあはれ、幽玄といった精神の美の追求を言い出すまでもなく、葬儀における人と人の最も基本的な悲しみや哀れみさえ、高望みなのです。1年で数万人が無縁の死を遂げています。若いうち仕事に奔走し短気になったため、金銭のしがらみのため、才能が認められず思いが遂げられない憤慨のため。苦勞して寂しく余生を過ごして、身内と疎遠になり、離婚し、子女と仲たがいして、がらんとして気にかける人はおらず、あるとき人生を終えてしまうのです。その時、インスタントラーメンの熱気がまだ立ち上っており、その後に、哀れんで骨灰を祀る身内や友人の一人もいないことさえあります。心の中の哀れみの花は、このように舞い落ちるのです。すべてどうしようもなく。

不景気の時期、まったく適当な仕事が見つけれなかった失業者。救済金を選ぶことは内心の最も深い所の尊厳を放棄することなので、寒風が吹きすさぶ路上で夜を明かしてでも、人にそうした自分を知られまいとしました。

年 70 近くの派遣労働者が必死になって工事を進め、亡き両親への線香を忘れなくとも、鉄筋の森林の中での安アパートで自分が突然死すると、遺体を引き受ける人はいませんでした。

バブル経済の時に体と家庭を顧みる余裕がなく、その後解雇された会社員は子供に拒絶され、妻に去られ、退職金頼みの老人を世話する者がいなくなりました。

人が多く押し合いへし合いする都市で、事業の挫折と人間関係の苦境に打ちのめされた家にうずくまり、瘦せて弱っている父の年金に頼って過ごし、引き続き給付を受けるためだけにその死を隠しさえする人。

雄壮で美しい都市化の過程の中で、子供と打ち解けて生活できない老人は、しかたなく住む人の少ない田舎に帰って、鬱憤と孤独を抱え、自分の最後の時を待っています。

彼らは大部分が無縁で死んでしまうでしょう。知る人も、弔いをする人もおらず、最後の高望みである墓地さえも、信仰を無にしない僧侶が提供するだけです。彼らの魂が彼岸に渡るとき、俗世間の時代の流れが依然としてほとぼしっているのみならず、無縁、無関係も気になりません。

哀れみを得られない庶民は、このようにやりきれないのです。しかし誰がまた時代の自然な過程を防ぎ止めることができるでしょうか。風はいくたびも吹いて、哀れみの花はむなしく枯れ落ちるのです。

三、まとめ

横より看れば嶺を成し側よりすれば峰を成す〔蘇軾「題西林壁」〕。一国について読んで理解するのは難しいものです。

国家は多次元のさまざまな要素が構成する有機体で、二言三言ではつきり言うことは、それほど容易ではありません。本文は、単一の角度の「知」だとしか言えないもので、「理解」だと聞き直る気にはなれません。

社会現象は国の倒影のようなものです。中国国内を振り返れば、無縁社会のいくつかの徴候がだんだん現れてきているのに気づくのは難しくありません。東アジア文化圏に同じく属して、同様に経済の急成長とソフトランディングを経験した中国と日本は、倒影にも重なり合うところがあるようです。特殊な国情の下で改革の深くにいる中国には、「無縁社会」の現象もさらに深く研究する意味があります。

最終的に、時代の産物もその是非を判定するのは時間だけです。無念にも枯れ落ちる花卉を眺め、感傷的に嘆く以外に、どこか遠くでまだ咲いていないか足を止めて見渡すのもよいでしょう。

読んだ本：

NHK「無縁社会プロジェクト」取材班『無縁社会』、高培明訳、上海訳文出版社

我的忏悔



艾新宇

湖北汽车工业学院 国际经济与贸易

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

六年前，我囿于选择，好坏之别，显于情理。但最后选择的事实成了那瓣心就像是一片荒漠，炙热的风在上方撒野无休，夹杂砾石与浮尘，没有寂静之地。那是一份独身的胆战心惊，难以释怀。时隔之久，如今这忏悔的开头却是真真切切地源于夏目漱石的《心》之所作，让人回忆起来不禁阵阵隐痛。先生的笔尖触动至我百年之遥的明治，文墨里的知识分子，向往爱情却顾及着友人，想护全友人又患失爱情，得到了爱情最终也愧别友人。如此日夜煎熬的文人心，如此层叠交织的爱与诚，在风雨摇坠的明治时期都显得格外灰暗与不堪。

书中具有故事性的三位可谓对我来说都有些许感慨，里面的“先生”让看着的我不断矛盾，不断冲突。起初，我看“先生”，他像是出世避尘的思想家，可言谈举止却是成谜。“九月见。”先生道。寒暄完毕，我迈步走向格子门外。房门与院门之间有一株郁郁葱葱的丹桂树，像要挡住我去路似的在夜幕下张开枝叶”。原本我总是欣赏这样的细节，“先生”言语不多却总给人留下小小感动，“九月见”，这三字一句是温柔等待也是如约期盼，守静的丹桂在“先生”的住处春秋几度，待到九月相见便是暗香疏影，这

三个字多少让人值得欣喜，“先生”说出这三字来也许无意却满是诚心。“我”也能在黑夜里看到它，还能认出它来，枝叶关情，让“我”不舍。我被无声打动，只是认为“先生”是个美好的人，笔者也精于生活的描写，让我能细细揣摩。“我重获自由之际，正是八重樱散落殆尽的枝丫上，开始长出如雾般朦胧绿叶的初夏时节。”所谓平静的表面下在不断颠覆，我起初看到的美好都是可悲的，“先生”活得如他自己所说，郁郁寡欢，不具备主动介入社会的资格，无法信任自己，一旦发生什么事情就会变成坏人，在独立自我的时代品尝着孤独的滋味。正是这样一个物，这样一个暴露了利己主义又忏悔恶果的人物，牵引着我的情绪，仿佛自己的影子被融进，一时陷入了恐慌。

书中的“我”是不谙世事的明亮曙光又是悲剧故事的发生者。笔者给出这样一位时代人物用意至深，“我”从“先生”那里获取爱情的经验和为人的教训，不要自我封闭的伦理，而要乐观善意的入世。“我”也是故事高潮的见证者，“我”收到了“先生”的遗书，这一切都拨云散雾开来，“先生”身陷于时代的危害，做不了一世好人，利己者害人害己酿成悲剧，“我”无奈看清了现实而继续活下去。我也许有时也是书中的“我”，那是最好的时代，也是最坏的时代，悲剧都已过去，可如果不吸取教训，悲剧也会是自己的结局。我也处于新生的最好时代，我也正直求知，可稍有羁绊也让我自己踌躇不前，像是一场黑暗的过去。

故事的可恶之处同是源于“先生”的旧友 K。他的所有行为如同“先生”所述可用“精进”一词而形容，他与“先生”的爱情之争无疑是故事的悲剧，如此精进的人也束缚于时代的旧道德。他悟“道”，却没有真正渗透“道路”，他的“道”是个人的，不合时宜，必然孤独。在我看来，K 的人生与我相距甚远，我没有 K 那般为道而牺牲一切的精神，没有祭奠时代的勇气，我只是看着他们的苦闷故事而隐隐不安。

引人不安的正是书中人物身上的利己主义，而这种利己主义

也正是与道义相冲突的。笔者夏目漱石在他的演讲中曾提到他所主张的“个人主义”，所谓“自己本位”是一种建立在“道义”之上的个人主义，没有一定程度的伦理修养为基础，就没有发展个性的必要也没有行使全权的价值。我想之所以这故事也会让我陷入忏悔，怕是当时的我利己多于了道义。演讲中也提到了“德育”，伪善只会让结果更加恶化，这样陷于利己与道义间矛盾的选择也正是充分暴露了人性。至此，看完先生的作品让我有勇气想起了六年前的事儿 ...

我与“先生”的时代不同，但忏悔的心理挥之不去。利己给对方带去的疼痛共情与我，而我面对这样的问题选择了逃避，“先生”最终忏悔远去，给我留下的却是训诫。我被这本书触动，是它的故事，是它的情结，我的确从一名日本作者的笔下仿佛看到了自己，在他的笔下赫然审视了自己，也许翻开它，我得到的就是忏悔的勇气。

夏目漱石《心》

「中国“改革開放”を支えた日本人」(NHK BS スペシャル、放送日:2019年2月10日)というドキュメンタリーを見て書いた感想文である。

私の懺悔

艾新宇

湖北自動車工業学院 国際経済と貿易

六年前の私は善し悪し、人情と道理という選択肢にとらわれていました。しかし最後に選んだ事実で、心は、焼けるように熱い風が上方で野蛮に暴れてやまず、石とほこりが入り混じった一面の広々とした砂漠のようになり、静けさはありませんでした。それは独身特有の恐怖と戦慄で、胸のつかえが取れることはありませんでした。長い時を経て、今のこの懺悔が始まったのは、まぎれもなく夏目漱石の『こころ』の仕業です。数々の人知れぬ苦痛を思い出してしまうのです。先生のペン先は百年かなたの明治から私の心を打ちました。作中の知識人は、愛情にあこがれつつも友人に気を遣い、友人をかばってまた愛情を失うことをひどく恐れ、愛情を得ても最後には恥じて友人と別れました。このように昼夜文人の心を苦しめ、このように重なり合って織りなす愛と誠意は、激動の明治時代ではとりわけ陰気な話に思えました。

作中で三名の登場人物はいずれも感傷的で、なかでも「先生」を見ていると私は絶えず混乱させられました。最初、「先生」は俗世を超越した思想家のようでしたが、立ち居振舞いが謎でした。『『また九月に』と先生がいった。私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄関と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐように、夜陰のうちに枝を張っていた。」もともと私はいつもこのような細部を鑑賞しています。「先生」

は言葉が多くないのに総じて小さな感動を残しています。「また九月に」という一言は、やさしく待つ心であり約束どおりになる期待でもあります。静かな木犀は「先生」の住まいで何度の春と秋を見守って、九月を待ち、ほのかな香りを漂わせます。この言葉だけでも喜ばしく、「先生」は無意識かもしれませんが誠意に満ちています。「私」もやみ夜の中にそれを見ることができて、さらに見分けることもでき、枝葉に心を動かされ、「私」はなごりを惜しんでいます。私は心を打たれ、「先生」がすばらしい人だと思いましたし、筆者が生活の描写に精通していることも事細かに推察できます。「私の自由になったのは、八重桜の散った枝にいつしか青い葉が霞むように伸び始める初夏の季節であった。」いわゆる穏やかな情景はすべて覆され、最初に見た美しさはすべて哀れみを誘うものになりました。「先生」は自分で言ったとおり生きており、気がふさいで面白くない様子で、主体的に社会に介入する資格を持たず、自分を信用できなくて、何かが発生すると悪人になってしまい、独立した自我の時代に孤独を味わっています。このような利己主義を暴露してまた悪の報いを懺悔する人物が、私の情緒を引きつけました。自分の姿が重なり、しばらくパニックに陥りました。

作中の「私」は世間知らずで、また悲劇の物語の発生者でもあります。筆者がこのような時代の人物を示す意図はとても深く、「私」は「先生」から愛情の経験と人生の教訓を得て、自らの閉じた倫理ではなく、楽観的で善意を持って実社会に出ようとします。「私」は物語の山場の目撃者でもあります。「私」は「先生」の遺書を受け取り、すべてが跡形もなく消え去ります。「先生」は時代の危害に陥って、生涯いい人でいられず、利己的な者が他人を害し己を害する悲劇を引き起こしました。「私」は否応なく現実をはっきり見て、引き続き生きていくのです。私も時として作中の「私」なのかもしれません。それは最も良い時

代で、最も悪い時代でもあり、悲劇はすでに過去ですが、教訓を吸収しなければ、悲劇が自分の結末にもなります。私も最も良い時代にいて、正直に知識を求めています、少しの束縛のためらって進めず、暗い過去にいるかのようです。

物語の嫌な部分は、「先生」の旧友 K に由来します。彼のすべての行為は「先生」の述べるように「洗練」の一語で形容できます。彼と「先生」の愛情の争いは間違いなく物語の悲劇です。これほど洗練された人も時代の古い道徳に縛られていました。彼は「道」に目覚めましたが、本当に「道」を身に着けたとはいえずその「道」は個人的で、時宜に合わないの、彼は必然的に孤独でした。思うに、K の人生は私と遠く離れています。私には K のように道のためにすべてを犠牲にする精神はなく、時代を弔う勇気もありません。彼らの苦悶の物語を漠然と不安な気持ちで見ているだけです。

不安に引き起こしているのは登場人物の利己主義で、このような利己主義は道義と衝突するものです。筆者の夏目漱石は彼の講演の中で「個人主義」に言及したことがあります。いわゆる「自分本位」は「道義」の上に確立される個人主義で、ある程度の倫理の教養を基礎としており、個性の発展の必要も全権を行使する価値もありません。私がこの物語を読んで懺悔に陥ったのは、恐らくその時の私のエゴが道義より強かったからです。講演の中でも「徳育」に言及がありました。偽善は結果をいっそう悪化させるだけで、エゴと道義の間で矛盾した選択に陥るのも、十分に人間性を暴露していると漱石は述べています。作品を読み終えて、六年前のことを思い出す勇気が出てきました。

私は「先生」と異なる時代にいますが、懺悔の心理は振り払えません。エゴが相手にもたらした痛みと共感し、私はこのような問題に直面して逃避を選びましたが、「先生」が最後に懺悔

して去ったことが、私に訓戒を残しました。私がこの本に心を打たれたのは、その物語、そのコンプレックスです。私は確かに日本の作家の言葉から自分を見るかのように、ふいに自分をじっくり見つめました。この本を開いて得られたのは、懺悔する勇気なのかもしれません。

夏目漱石『こころ』

「中国“改革開放”を支えた日本人」（NHK BS スペシャル、放送日：2019年2月10日）というドキュメンタリーを見て書いた感想文である。

改写让文字不再徘徊



周喬澤

宁波大学图书馆与信息中心

教师教育学院基础教育学部

笹川杯作文コンクール 2020 年度一等奖

文字之间的拥抱与疏离，构成了纷繁复杂的文学世界。一个不争的事实是，有许多的文字在徘徊，也许是“老掉牙”的固化之作，也许是新生的摸索之作，被囚于一隅，难以被世人关注，只得独自徘徊。这样的情况在如今的文学界并不少见。而两位日本作家却似乎为这一难题探索出了有一定可行性的出路。

太宰治的《拔舌雀》改写自日本民间童话故事《舌切雀》，乙一的《箱庭图书馆》甚至整本书都是改写网友投稿作品而来的。改写虽然不如原创那样独立存在，但它拥有着不容忽视的进化与升华意义。

改写在时代的襁褓中生发，能让个体的意识渗入前人的文字，带来丰满的血肉与新的灵魂。《拔舌雀》绝非简单的扩写，而是把一个曾经仅仅适用于教化，歌颂善良的寓言故事改写成了主题更为复杂深刻，带有太宰治个人特色的时代映射小说。他在文章开篇便表明了自己的写作意图——好让那些为了让日本度过国难而奋斗着的人们于百忙之中能得到片刻的慰藉。基于阶级统治的教化的文字不再被人民需要，通俗又有新意的小说才拥有生命力。“老爷子”与“老婆子”的家长里短，本就适合作为战争高压下精神

贫瘠之人的谈资，这样的故事即便只是浅读，也已经有不少的意趣。

“我看起来好像是什么事都不做，其实满不是这么回事啊，有些事是非我不可的。我不知道能不能活到发挥我真正价值的那一天，可要是那一天真的来了，我自然会奋发努力，大有作为的。”这句“老爷子”含有积极倾向的言语，符合战争中人们对希望的渴望。

太宰治在保证雅俗共赏的同时，没有放弃自己的文学追求。热爱读书，自称无欲无求的“老爷子”和粗俗鄙陋但尽心照顾“老爷子”的“老婆子”看似是完全对立的人物，实际上却是相互交织，对两者间尖锐矛盾的细节描写成为时代与人性的缩影。除此之外，作者还对原作情节进行了修改，其中最为明显的就是结尾处的增添，老爷子因为妻子带回来的金币成为一国宰相，最后一反常态感慨多亏了自己的妻子，这是老爷子对自己本来面目某种程度上的认清，是作者对功利主义的讽刺以及对当时日本社会的反思。太宰治的改写让古旧的文字拥有了可以让人感同身受的血肉以及时代的灵魂，原本可能永远徘徊于原地的经典开始向前走，打破文学意义上的生分，拥有了与后世之人交流甚至共鸣的能力。

如果说太宰治的改写是清冷的，那么乙一的改写则是热闹的。通过“乙一小说再生工厂”这一企划，一些网友未被采用的小说稿件成为了乙一的灵感源泉。在《箱庭图书馆》的后记中，乙一讲述了小说创作的过程，点评了他挑选出来的文章所具有的优点及缺陷。即便是内容混乱的作品，只要拥有很好的未完成性，就能在他的笔下获得新生。敢叫原作换新天的笔法尊重着，描摹着，聆听着，最终归于创作。这样的改写既让不成熟的原作者感到惊喜的可能性，又填补了老牌作家的灵感洼地。乙一表明：“写出这篇作品让我感觉自己好像有所成长。”也许这样的创作模式有偷懒之嫌，但这无疑是热闹的，是思想与思想之间的碰撞，是经验与创新之间的交融。在《箱庭图书馆》的背后，年轻思想的火花在拥有丰富经验的作家的笔下避开了熄灭的命运，在名为“乙一”的薪柴的助力下，璀璨的光芒挣脱了自身的桎梏而撒向世界。

两位作家其实是参与了两场不同的斗争，一场与时代，一场与经验，但同样都是面向日本文学发展发起的斗争。日本的文脉如同其所处的地震带常有颠扑却不灭，两位作家的改写像是新的手术式，与日本社会的演进共同形成了一种精神上的激荡。战争带来的不仅是社会背景的改变，更是整个人文生态的巨大裂缝，这使日本文学在战前、战中与战后呈现出截然不同的倾向。太宰治的改写，是对徘徊于原地，浑然不知危机来临的日本传统文学重生式的挽救。而日本当下正处于一个相对板结化的时代，任何固定的文学形式都可能成为功利主义下的循规蹈矩，改写本身甚至都会退化为烂俗的经验。乙一的改写难得地抓住了文学发展的命脉，利用经验与粗俗的选择抗衡，不失为对日渐懒惰的日本轻小说产业的间接洗礼。改写基于两位作家的个人意志，又见证了日本文学成长与堕落交织的传承。

迎合时代过于谄媚，而悖逆它又会走向灭亡。面对时代的困局，无论是日本的作家还是中国的作家，都应该有意识地把历史的遗珠拾起，用自己的文字把它“擦干净”，才能使世界观与方法论不至于脱节。而市场经济强调了经验的价值，生疏的创新难以被大众接受，所以“再生工厂”的形式在无奈之下显现出“以退求进”的趋势。在浮躁而焦虑的社会背景下，对尚未被污染的文字进行提携，可以一定程度上克服艺术惰性，引导文学市场进行发展革命。

书籍由文字构成，如果文字徘徊不前，书籍也终将陷于停顿。文字的枷锁，需要文学工作者用自己的笔来松开，需要人民的眼睛来打开。改写的作用在众多作家的实践下得到了证明，是让文字不再徘徊的一条出路。日本、中国，乃至世界的文学，都在看似明亮的天空下摸索，除了改写，还有更多的道路急需去走。

所阅图书：

《御伽草纸》（天津人民出版社）

《箱庭图书馆》（人民文学出版社）

改作でテキストがうろつかなくなる

周喬澤

寧波大学図書館与信息中心
教師教育学院基礎教育学部

テキストが付いたり離れたりすることで、入り組んだ複雑な文学の世界が構成されています。否定できない事実のひとつとして、多くのテキストはうろついています。「古くさい」解釈の固まった作品でも、新しく生まれた手探りの作品でも、片隅にとらわれていると世間の人から関心を得られず、独りうろうろするほかないのかもしれませんが。このような状況は今の文学界では珍しくありません。この難題について、二人の日本の作家が一定の現実的な道を探し出したようです。

太宰治の『お伽草紙』の「舌切雀」は、日本の昔話「舌切雀」を改作したもので、乙一の『箱庭図書館』に到っては全作がネットに投稿された作品の改作です。改作はオリジナルのように独立して存在するものではありませんが、改作の持つ進化と昇華の意味は軽視できません。

改作は時代の襁褓の中で生まれ、個人の意識を先人の文字にしみ込ませて豊かな血肉と新しい魂をもたらすことができます。太宰治の「舌切雀」は決して単純な引き延ばしではありません。かつて教化に適していただけの、善良を賛美する寓話が、より複雑で深いテーマの、太宰治の個人の特徴を帯び時代を映し出した小説に書き直されているのです。彼はこの作品の冒頭で制作の意図を、「日本の国難打開のために敢闘してゐる人々の

寸暇に於ける慰勞のささやかな玩具として恰好のものたらしむ」と表明しています。身分制度に基づいた教化のテキストはもはや必要とされておらず、分かりやすく新しい発想の小説こそ生命力を持つのです。「お爺さん」と「お婆さん」の世間話は、もともと戦争のストレスで精神のやせた人の話の種に適しています。このような物語は、ただ浅く読むだけでも多くの面白みがあります。「おれは何もしてゐないやうに見えるだらうが、まんざら、さうでもない。おれでなくちや出来ない事もある。おれの生きてゐる間、おれの真価の發揮できる時機が来るかどうかわからぬが、しかし、その時が来たら、おれだつて大いに働く。」ここで「お爺さん」が前向きな言葉を含めているのは、戦時中の人々の希望に対する渴望に合っています。

太宰治は誰でも楽しめることを保証すると同時に、自分の文学の追求を放棄していません。本を読んでばかりで欲求がないと自称する「お爺さん」と、俗っぽくて無知だが心を尽くして「お爺さん」の世話をする「お婆さん」は見たところ完全に対立する人物ですが、実際には互いに入り交じっており、二人の間の鋭い対立の細かい描写は当時の人間性の縮図を描写したものになっています。また、作者は原作の流れにも手を入れています。中でも目立つのは結末部分の加筆です。お爺さんはお婆さんの持ち帰った金貨のおかげで一国の宰相になり、最後にいつもと全く違って妻のおかげだと感慨を覚えています。これはお爺さんが自分の本来の姿をそれなりにわきまえているということで、作者による功利主義のへ風刺と当時の日本社会対抗に対する再考です。太宰治の書き直しにより、古くさいテキストが実際に体験したことのように感じられる血肉と時代の魂を手に入れました。もともと永遠にその場をうろうろしていたであろう古典が前へ歩きだし、文学の意味の上の溝を打ち破って、後世の人と交流し共鳴する能力さえ得たのです。

太宰治の改作をうら寂しいと言うならば、乙一の改作は賑やかなものです。「オツイチ小説再生工場」という企画を通して、ボツになったネット小説の原稿がいくつか乙一の靈感の源になりました。『箱庭図書館』のあとがきで、乙一は小説の創作過程を述べ、彼の選出した文章の長所と欠点を講評しました。内容の混乱した作品であっても、未完成さに優れてさえいれば、彼の手で新たな生を得ることができます。敢えて原作の世界を書き換える筆致で尊重、描写、傾聴したものが、最終的に作品になるのです。こうした書き直しは未熟な原作者にサプライズの可能性を感じさせ、またまた著名な作家の靈感で原作の穴を埋めるものです。乙一は「この作品を書いたことで自分が少しは成長したようだと感じる」と明言しています。こうした創作モデルには怠惰の疑いが持たれるかもしれませんが、明らかに賑やかな、思想と思想の衝突で、経験と革新の融合です。『箱庭図書館』の裏で、若い思想の火花が経験豊富な作家の言葉により消える運命を回避し、「乙一」という燃料の助力のもと、きらりと光る光芒が自身の束縛を抜け出して世界に放たれたのです。

二人の作家は実のところ異なる闘いに関わっており、片や時代、片や経験ですが、いずれも日本の文学の発展に向かって始めた闘いです。日本の文脈はその位置する地震帯のように揺れて打撃にあっても壊れることはありません。2人の作家の改作は新しい手術の術式のようなもので、日本社会の進化と共に精神上の激しい揺れ動きを形成しました。戦争がもたらしたのは社会背景の変化のみならず、文化のあり方の巨大な割れ目でした。それにより日本の文学に戦前、戦中、戦後とはっきり異なる傾向が現れています。太宰治の改作は、その場をうろうろし、危機の到来にまるで気づかなかった日本の伝統文学を再生させる救済です。日本が凝り固まっている今の時代、どんな固定の文学形式でも功利主義のもと融通が利かないものです。改作その

ものが退化して無味乾燥な経験にさえなってしまいます。乙一の改作は文学の発展の最も重要なものを捉えて、経験と低俗な選択との対抗を利用している貴重なもので、日に日にだらける日本のライトノベル産業に対する間接的な洗礼だといえます。改作は2人の作家の個人の意志に基づいており、日本の文学の成長と墮落が織りなす伝承を証明するものでもあります。

時代に迎合してあまりにも媚びへつらうと、正道に反してまた滅亡に向かうでしょう。時代の難局に直面して、日本の作家であれ中国の作家であれ、歴史に埋もれた作品を意識的に拾い上げ、自分の筆致で「磨き上げ」てこそ、世界観と方法論が歴史的な文脈から逸脱するのを防げるのです。市場経済が経験の価値を強調し、慣れない革新は大衆に受け入れられにくいため、「再生工場」の形式はやむなく「下がることで進む」傾向を見せています。落ち着きのない社会背景のもとで、まだ汚染されていないテキストを引き立てれば、ある程度は芸術の惰性を克服して、文学市場を革命の発展へと導くことができます。

書籍はテキストで構成されています。テキストが足踏みしては、書籍も結果的に行き詰まってしまいます。テキストの圧迫と束縛は、文学の従事者が自分のペンで解き放ち、人々の目で開く必要があります。改作の働きは多くの作家の実践のもとで証明されており、テキストが前へと踏み出す道です。日本、中国、そして世界の文学は、いずれも明るい空の下で模索しており、改作の他にもより多くの道を急ぐ必要があるようです。

読んだ図書：

『御伽草紙』（天津人民出版社）

『箱庭図書館』（人民文学出版社）

站在坡道上的女人们



王诗妍

浙江越秀外国语学院 网络传播学院

笹川杯作文コンクール 2020 年度一等奖

我们谁也不是，不是母亲，不是妻子，也不是谁的女儿。

——《坡道上的家》

《坡道上的家》是日本作家角田光代所著的小说，故事主要讲述了新手妈妈里沙子作为陪审员参加的一场杀婴案审判，被告水穗亲手溺死了八个月大的女儿，随着审判的深入，里沙子发现自己与水穗境况相似：放弃工作专心育儿，辛勤付出却被当作理所当然，丈夫在育儿上的缺席，家庭冷暴力和畸形的爱……在审判的最后，水穗获罪入狱，作者借由里沙子之口说出“因为那不是水穗的事，而是我的事”，直陈当代主妇的困境。

女性群体中并不是每个人都会成为主妇，但《坡道上的家》能获得如此好评是因为角田光代在作品中揭露了深刻现实——女性生育和自我价值之间的巨大割裂，这样的割裂几乎横亘在所有女性的生命中。无论我们是不是主妇，我们都是女性，生育和女性紧紧地挂钩在一起，以至于社会环境默认女性都会结婚生子。

每个女性的生命中都存在必须面对的一种可能：我究竟会不

会成为那个站在坡道上的女人？我必须为了家庭牺牲我本能得到的一切吗？

有一句话流传很广，叫做“女子本弱，为母则刚”，似乎平时再普通不过的女人，一旦结婚生子成为母亲，就会变得无所不能。这是一句赞赏母亲的话语，同样也是男权社会套在母亲身上的枷锁。社会将母亲们推上神坛，而当母亲们无法做到“为母则刚”时，就会被群起而攻之。书中的里沙子和水穗就是如此，她们放弃工作失去社交，可谓付出了一切来养育孩子，一旦孩子不听话或是表现得不如别的孩子，被指责的仍旧是她们。被绑架的母亲们心有困惑也得不到解决，周围人只会用“母性本能”来敷衍了事。

书中并未描写激烈的言语碰撞，没有彼此激烈的对骂，矛盾的爆发都悄然无声，言语暴力被看似柔软温和的为她着想的言语包裹起来，恶意变得难以察觉，更毋庸说反抗了，更可怕的是这样的恶意成为常态，就连主妇自己也放弃思考和决定，默许被这样对待，默认自己不如别人，最终失去一切的她们只能沉默，成为无法开口辩解的提线木偶。

角田光代曾说自己的写作动力与创意来源于愤怒，来自不平则鸣。在她的笔下，困惑于母性本能，挣扎于维系育儿与工作平衡，试图寻找自我的女性形象不胜枚举。《第八日的蝉》中，偷走情人的婴孩，却倾注母爱将之抚育四年的野野宫希和子，被捕时说的最后一句话是“那孩子还没吃早餐呢”，尽管不是自己亲生的孩子，希和子依然是个母亲。《对岸的她》中，离职五年重返职场的主妇小夜子，奔波于公司、保育园和家之间，羡慕着自由洒脱的职业女性友人。以及《坡道上的家》中，互为倒影的里沙子和水穗，只需要投下一颗石子，荡起的涟漪便可使二人的界限崩塌。这些母亲怀有各自的爱和绝望，而社会却对此置若罔闻，直至悲剧发生。

我想角田光代所描写的故事更像是一种警醒，对于社会不公的警醒，她寻找那些潜藏在社会共识中对女性的恶意，将赤裸的

真实展现给读者。在此之前,那些恶意就是房间里的大象,它存在,我们却视若不见。

女生不如男生,女生不适合学理科,女生应该在家带孩子,女生没有逻辑思维,女生就是不讲道理。这些刻板印象伴随着女性成长的每一个阶段,在反复的自我怀疑中,女性终于被环境塑造造成刻板的女性。

值得注意的是,近年来女性权益运动蓬勃发展,Me Too 运动和姐姐来了等话题获得大量女性支持,随着妇女意识逐渐觉醒,描写女性的作品有了更多的关注,除文中主要讲述的书籍外,《82 年生的金智英》《黑匣子》《房思琪的初恋乐园》和《使女的故事》等书都曾引起过女性群体的广泛共鸣。女性作家同读者们一起,致力于改变刻板印象,反对压迫与性别歧视,鼓励彼此实现自我价值。

在《坡道上的家》改编电视剧中,审判长宣布判决时说了这样一席话:“因初次育儿常感到困惑,又被周围的人无心的言行所影响,更丧失了自信,没有人来帮助自己,也无法求助,这也是无法否认的事实。被告人的罪行是由被告人独自犯下的,但究其根本,和本次案件有关系的包括被告人丈夫和婆婆在内的家庭成员等所有人的各种情况混合在一起,最终对被告人所造成的巨大心理压力才是根本原因。”

水穗的悲剧已然发生,究其根本却是社会的悲剧,如何避免这样的悲剧在里沙子身上重演,是每一个人都值得为之深思和努力的,因为我们都有成为里沙子和水穗的可能性。而我由衷期盼世上每一位女性,都是她自己。

阅读文献:角田光代《坡道上的家》

参考文献:角田光代《对岸的她》

角田光代《第八日的蝉》

电视剧《坡道上的家》

【日本語訳】

坂道に立つ女性たち

王詩妍

浙江越秀外国語学院 網絡傳播学院

私たちはだれでもない、母親でもなく妻でも、だれかの娘でもない。

——『坂の途中の家』

『坂の途中の家』は角田光代が書いた小説です。主なあらすじは、小さい子供のいる里沙子が補充裁判員として我が子を虐待死させた母親の裁判に関わります。被告の水穂が八か月の娘を溺死させた事件です。審理が進むにつれ、里沙子は水穂と自分の境遇が近いことに気づきます。仕事を諦めて育児に専念し、苦勞しても当然だと思われ、夫は育児に参加せず、家庭内の冷たい暴力と歪んだ愛……裁判の最後に水穂は有罪となって入獄します。作者は里沙子の口を借りて「それは水穂のことではなく、私のことだ」と言わせ、現代の主婦の苦しい立場を率直に述べています。

女性のすべてが主婦になるわけではありませんが、『坂の途中の家』がこれほど好評なのは、角田光代が作品中で深刻な現実、女性の育児と自分の途中の家』価値との間にある巨大なギャップを暴露しているからです。こうしたギャップはほとんどすべての女性の生命の中に横たわっているものです。私たちは主婦であろうがなかろうが女性です。育児と女性はきつく結びつけられており、そのために社会環境は女性すべてが結婚して子供

をもうけることを黙認しています。

すべての女性の生命の中に、直面せざるを得ない可能性が存在します。自分はいったいあの坂道に立つ女性になってしまうの？家庭のために自分がもともと得られるすべてを犠牲にしなければならないの？

「女は弱く母は強し」という言葉が広く伝わっています。平凡な女性が結婚して母親になるとなんでもできるように変わるとされているようです。この言葉は母親を賞賛するものですが、男権社会が母親の身にかぶせる圧迫と束縛でもあります。社会は母親たちを祭壇に押し上げますが、母親たちが「母は強し」を実現できないと、こぞって非難するのです。作中の里沙子と水穂もそうです。彼女たちは仕事をあきらめ付き合いを失い、すべてを子育てに差し出したと言うべきですが、子供が言うことを聞かなかったり他の子より劣っていたりすると責められるのはやはり彼女たちなのです。身動きの取れない母親たちは心に悩みがあっても解決できず、周囲人は「母性本能」でお茶を濁すばかり。

作中では決して激烈な言葉の衝突を描写していません。激しい罵り合いはなく、対立の爆発はすべてひっそりと静かです。言葉の暴力は柔らかく温和に彼女の考えた言葉を包み込んでいるようで、悪意が察しにくいものになり、まして抵抗するなどあり得ません。さらに恐るべきことはそうした悪意が常態になり、主婦自身さえ思考と決定を放棄して、そうした扱いを黙認し、自分が他の人に及ばないことを黙認して、最終的にすべてを失って沈黙するほかなくなり、弁解のできない操り人形になってしまうのです。

角田光代は以前、自分の創作の原動力とアイデアは怒りから生まれ、不公平な扱いを受ければ黙ってられないのだと語っています。彼女の作品では、母性本能に困惑し、育児と仕事の

バランスにもがき、自己の女性のイメージを探そうと試みれば
枚挙にいとまがありません。『八日目の蟬』では、不倫相手の赤
子を誘拐して母としての愛を注ぎ四年間育てた野々宮希和子が
逮捕されたときの最後の一言は「その子は朝ごはんをまだ食べ
ていないの」自分が産んだ子供ではなくとも、希和子はやはり
母親なのです。『対岸の彼女』では、離職から五年で職場に戻っ
た小夜子が会社、保育園と家の中で奔走して、自由で垢抜けた
キャリアウーマンの友人をうらやんでいます。そして『坂の途
中の家』で影の重なり合う里沙子と水穂は、石ころ一つ投げ込
んでさざ波を立てるぐらいで二人の境界線が崩れてしまいます。
母親たちがそれぞれ愛と絶望を抱いていても、社会が少し
も耳を貸さなかったため、悲劇が起きたのです。

角田光代が描いた物語は警句のようなものだと思います。社
会の不公平さに対する警句です。彼女は社会の共通認識の中に
潜む女性への悪意を探し出して、赤裸々な真実を読者に示して
います。それまで、そうした悪意は部屋の中の象でした。存在
していても、私たちは見て見ぬ振りしていたのです。

女は男に及ばない、女は理系に向かない、女は家で子供の世
話をするべきだ、女には論理的思考がない、女は理不尽だ……
こうした型通りの印象は女性の成長段階に伴ってきます。自ら
懐疑を繰り返す中で、女性はついに環境のせいで型通りの女性
になってしまうのです。

注意すべきことは、ここ数年来女性のエンパワーメント運動
が盛んに発展していることです。Me Too 運動やその韓国での広
がりには多くの女性から支持が集まりました。女性の意識が次第
に目覚めるにつれて、女性を描写した作品が多くに関心と呼ん
でいます。ここまで紹介した本の他にも『82 年生まれ、キム・
ジョン』、『ブラックボックス』、『房思琪の初恋の楽園』、『ハン
ドメイド・テイル / 侍女の物語』なども幅広い女性の共鳴を起

こしています。女性作家は読者達と一緒に、型通りの印象を変え
るべく力を尽くして、圧迫と性差別に反対し、互いに自己の
価値を実現することを励ましています。

『坂の途中の家』を原作とするドラマで、裁判長は「はじめて
の育児に戸惑っているなか、周囲の人の言葉、夫の大声や罵声
に恐怖を感じて、さらに自信をなくしたこと、だれにも助けて
もらうことができなかったことや、助けを呼ぶこともできな
かったことは、事実としては否定できない。被告人の罪は被告人
が独りで犯したものだが、元をたどれば、本件に関わる、被告
人の夫と家庭の構成員などを含むすべての人の各種の状況の混
ざりあった結果、最終的に被告人にもたらした巨大な心理的圧
力が根本的原因である」と話しています。

水穂の悲劇は起きてしまったことですが、元をたどれば社会
の悲劇であり、こうした悲劇が里沙子にも繰り返されるのをど
う防ぐべきなのかは、一人一人が深く考え努力するに値します。
私たちの誰にも里沙子や水穂になる可能性があるからです。そ
して世界中の女性一人一人が彼女自身であることを心から期待
しています。

／

人生易逝，且听风吟



余韦塘

北京化工大学 材料科学与工程学院

笹川杯作文コンクール 2020 年度一等奖

一切都将一去杳然，任何人都无法将其捕获。我们便是这样活着。

—— 题记

谈到日本文学，村上春树是无法绕开的一个名字。无论我对东野圭吾、川端康成多么喜欢，都不能对村上春树熟视无睹，因为他的作品早已漂洋过海，像蒲公英一样在广阔的世界里生根发芽。很早之前，我就对村上老师的大名有所耳闻，但是横亘在我们之间的，是传统观念的大山（自己觉得读不懂文学大家的书），所以我与村上老师的故事开始得很晚，晚到那年的生日，朋友无意间送了我一本书，一睹之下才恍然发觉。

这本小说是村上老师作家生涯的开始，也是我们相识的开始。小说的内容很简单，一个男孩跟一个女孩在夏天相识。小说的语言很直白，情节也很简单，没有转折、没有起伏。语调谈谈的，但是却给人一种涩涩的感觉，它似乎在表达着什么，就像每个人的青春里都曾有过矛盾的，不想为人所知的，但又渴望被人了解的东西。

第一次翻开这本书，是高一那年。懵懵懂懂的我，渴望爱与被爱，像书中的那个男孩一样，明明想要靠近喜欢的女孩却唯唯诺诺，直到逐渐失去，才恍然大悟。当时只能体会到那种爱而不能的忧伤，心如绞痛的无处抒发。正如村上老师写道：“等到夏天回去，我便经常走那条同她一起走过的路，坐在仓库石阶上一个人眼望大海。想哭的时候却偏偏出不来眼泪，每每如此。”

第二次翻开这本书，是高三那年。高考失利的我，承受着生活所给予的苦痛，浑浑噩噩之下，我又打开了它，那个时候不再是忧伤，而是一种悔恨，就像书中的男孩失去了他最重要的姑娘，我也失去了人生中最重要转机，但是，我开始学会去安慰自己，也渐渐明白了错过的东西就再也找不回来了，即使费尽周折去寻找，但仍然是徒劳，这高考失利的遗憾，也许就永远存在了。正如书中那一句“然而，这一切宛如挪动过的复写纸，无不同原有位置有着少许然而确实无可挽回的差异。”

第三次翻开这本书，是去年。整理高中书籍的时候，我偶然间在书橱的角落发现了它，抚摸着一页页熟悉的纸张，渐渐将身心沉浸其中。读过一章又一章，我开始感慨自己从前的纯真，开始感叹自己失败时的自怨自艾，我也时常会想村上老师在创作的时候，会不会也对自己的曾经有所感触呢？

“而今识尽愁滋味，欲说还休，欲说还休，却道天凉好个秋。”人生回首，不过如此。还记得将远行那天，我放下俗事，伫立在清凉的门前，端一杯清茶，轻轻摇晃杯中透出的过往时光，将心归零，割舍纠结于心的如烟往事，俱忘却一切烦恼，敞开心扉的大门，最后一次去品味这本书中的故事，恍惚之间，我看到了那个鼓起勇气告白的少年；看到了那个含着泪水，直面失败的少年；看到了那个一边嗤笑过往却又不经意间哽咽的少年。夜深人静的时候，朋友打来电话，惊醒了沉醉在书中的我，絮絮叨叨之间，朋友问到了我现在的状况，现在的感受，我想很清楚的告诉他四个字：人生易逝。可是，他岂能通过想象来拼凑我的心碎？但我

知道，这个悠长的夜根本不会将路过的风景变换，再也不骚动的笔尖上，也只能重复着昨天的故事，而那只能在朋友的问询的空间，蘸着孤寂的心情，写下一份迷离的回忆。站在灯红酒绿的城市中间，被生活抹去棱角的我，不复青春的热血与锐气，开始去渴望这种安逸的生活——愿有一庐，驱寒避暑。内有猫犬，绕膝入怀。琐事繁星，安有通途。冬日饮酒，雨夜安眠。

席慕容曾说：“青春是一本太仓促的书。”逝去的青春，是一段迷茫、固执、挥霍的岁月，轻盈散淡却又扣击心扉。直到今天，我还是只能品味出这本书中最浅显的道理，没法真正体会到村上老师所想要表达的东西，但是书里的情节确实像是一面镜子，模模糊糊的映出了我自己的影子。

最后，我想用书中最喜欢的一句话来结束，“如果有人问：幸福吗？我只能回答：或许。因为所谓理想到头来就是这么回事。”人生易逝，愿君一品《且听风吟》。

【日本語訳】

人生はつかの間、風の歌を聴け

余韋瑋
北京化工大学

あらゆるものは通り過ぎる。誰にもそれを捉えることはできない。僕たちはそんな風にして生きている。

——前書き

日本の文学に言及するなら、村上春樹の名は避けて通れるものではありません。東野圭吾、川端康成がどれほど好きだろうとも、村上春樹を見ながら見ないふりをすることはできません。彼の作品がとっくに海を渡っており、タンポポのように広い世界で根を下ろし芽吹いているからです。かなり前から村上先生のお名前がうわさに聞いていましたが、古い観念の大きな山（自分は文学の大家の本を読んでも分からないと感じる）が横たわっていたので、村上先生の作品を読むのが遅くなりました。ある年の誕生日、友人が何気なくくれた本を一目見てはっと気づいたのです。

この小説は村上先生の作家生活のスタートで、自分が初めて知った作品でもあります。小説の内容はとても平凡で、夏にある少年と少女が知り合うというものです。言葉遣いが率直、流れもシンプルで、曲折や起伏がありません。語調も淡々としているのですが、なんだかすつきりせず、その引っかかりが何かを表しているようです。誰も青春時代に経験する矛盾のように、知られたくはないのに理解を渴望するもののような。

初めてこの本を開いたのは、高校に入った年でした。ぼんやりしていた自分は恋愛を渴望しており、作中の少年のように、好きな女の子に近づきたいことははっきりしているのに唯々諾々としていて、失ってからそのことに気づきました。愛してもできない憂いと悲しみを味わうことしかできなくて、心痛は言葉に表せないものでした。ちょうど村上先生が「僕は夏になって街に戻ると、いつも彼女と歩いた同じ道を歩き、倉庫の石段に腰を下ろして一人で海を眺める。泣きたいと思う時にはきまって涙が出てこない。そういうものだ。」と書かれたように。

二度目にこの本を開いたのは、三年のときでした。大学入試に失敗して、生活の苦痛に耐えていた自分は、またぼんやりとこの本を読んだのです。当時は憂いも悲しみもなく、後悔の心情でした。作中の少年が大事な少女を失ったように、自分も人生で一番大事な転機を失いましたが、自分を慰める術が身につきはじめていました。逃したものはもう取り戻せないことも少しずつ分かってきました。たとえ力を尽くして求めても徒労は徒労です。大学入試に失敗した無念さは永遠に存在するかもしれません。ちょうど作中にあるように「しかしそれはまるでずれてしまったトレーシング・ペーパーのように、何もかもが少しずつ、しかしとり返しのつかぬくらいに昔とは違っていた」のです。

三度目にこの本を開いたのは去年でした。高校の本を片付けていたとき偶然に書棚の隅で見つけ、一枚一枚なじみのある紙をなでて、だんだんその中に浸っていきました。一章また一章と読み進めるうち、自分の昔の純真さに感慨を覚え、失敗した時の悔恨に感嘆いたしました。村上先生が執筆するときもかつての自分に思うところがあったのかな、とよく思うようになりました。

「今愁いの滋味を識り盡くし、説かんと欲すれど還た休み。説かんと欲すれど還た休み、卻って天涼しく好き秋と道う」〔訳注：ここは村上作品と関係なく辛弃疾（1140-1207）の『醜奴兒』の一節です〕人生を振り返ってみると、大したことはありません。遠出した日のことをまだ覚えています。雑用を放り出して、こぎれいな戸口にたたずみ、緑茶のグラスを揺らして過ぎた時間を思い、心をリセットしました。心に絡みついた煙のような昔のことを捨て去って、すべての悩みを忘却し、心の扉を開け放して、最後にこの本の物語を味わってみると、ぼんやりしているうち、勇気を奮い起こして告白する少年が目目に浮かびました。涙を浮かべて失敗に向き合う少年、過去を笑いながら気づかぬうち涙にむせぶ少年が。夜が更けて人が寝静まったころ、友人から電話があり、本の中に浸っていた自分は我に返りました。だらだらしゃべるうち、友人に近況や今の気持ちを訊かれ、人生はつかの間だと言い切ろうと思いました。しかし、彼が想像を通じて私の張り裂けた心を継ぎ合わせるはずはありません。でも、この長い夜が通り過ぎた景色を変換することはないことは分かっています。二度とペン先を騒がせることもありません。昨日の話を繰り返すことしか、友人に質問される空間にいることしかできないのです。孤独で寂しい気持ちをペン先に付け、ぼんやりとした追憶を書きます。贅沢で享樂的な都市の真ん中で、生活に鋭気を削がれた自分は、青春の情熱と勢いを取り戻すことはなく、のんびりした生活を望むようになってきました――暑さ寒さをしのげる質素な家。中にはじゃれついてくる犬や猫。こまごましたことが無数にあり、開けた道はなく、冬には酒を飲んで、雨の夜には安眠するような。

席慕容の言葉に「青春はあまりに慌ただしい本だ」というものがあります。過ぎていく青春は、茫漠として、頑固で、浪費する歳月で、しなやかでゆったりとしているのに心の扉をノッ

クしてきます。今日に至ってもなお、この本の最も分かりやすい道理を味わうことしかできなくて、本当に村上先生の表現したいものを体得することはできていません。しかし作中の場面は鏡のように、ぼんやりと私自身の姿を映しています。

最後に、この本の最も好きなフレーズで結びたいと思います。「幸せか?と訊かれれば、だろうね、と答えるしかない。夢とは結局そういったものだから」。人生はつかの間、『風の歌を聴け』を味わってみてください。

二律背反——《菊与刀》后对日本的感性体会



韦雨果

中国传媒大学电视学院

笹川杯作文コンクール 2020 年度一等奖

初看日本，这是一个摩登而素净的国度——东京塔上，便可远眺富士山的明净；天空树旁，便可望见隅田川的澄澈。神社旁，新干线飞驰而过；鸟居外，航空港熙熙攘攘。自然与人文在这里交汇，古朴与新潮在这里碰撞，静谧与喧哗在这里重合。“万物并育而不相害，道并行而不相悖”，无论是东京的车水马龙亦或是北海道的层林叠翠，日本列岛和谐地包容着万物，让他们交相辉映，互不相侵。

再看日本，是基于美国文化人类学家鲁思·本尼迪克特所著《菊与刀》一书的。鲁思笔下的日本，抛却了日本现代飞速发展的物质成果，而从精神上探究日本人与大和民族的秉性。阅读本书后，方才发现本人对日本的第一印象，只是日本波光粼粼的海面上的冰山一角。众多更深层、更隐含的元素，还有待探索、发现与验证。读毕此书，方才发现，复杂、矛盾甚至相悖，早已渗透进日本文化的方方面面。

日本人爱美而黩武。“山谷明月光，流萤皆彷徨”，“物哀”之美，自江户时代便随风潜入夜，从文学潜入文化，成为日本文化不可或缺的古老元素。长谷川等伯用寥寥几笔勾勒出两三棵松树旋即

收笔，却用留白描绘出松林之深远幽寂。“幽玄”之美，百年前便已化作浮世绘与水墨画中的“留白”，默默熏陶与塑造着日本人的独特美学文化。大和民族身体力行、代代相传，让“爱美”成为国的主流。然而，无论是古代的数次“合战”亦或是近现代的多次侵略战争中，日本人在爱美的同时，却仍还在摧毁着美。毁灭与屠杀中双手沾满鲜血的日本军人，依然能悠然享受茶道花道的美好；自己心中的美被破坏了，便要以死殉葬。如秋叶之静美，增添最后一丝美好。爱美，却毁灭美。黩武，却崇尚“和”。

日本人尚礼而好斗。每逢传统节日，神鸦社鼓、流光溢彩是日本街头的常态，对传统节日的尊重与传承印证了其拳拳尚礼之心。谦辞与敬辞纷繁复杂，晦涩难懂，却需根据不同的人灵活应用，即便是日本首相，也会对下榻酒店的清洁工写下一封真诚的感谢信。学不会察言观色、不知礼节，便难以在日本社会立足。然而，武士道精神支配下的他们，却会以最野蛮的方式解决矛盾——不是你死，就是我亡。狭路相逢，血溅五步。对于他人生命无情地剥夺，却在这个尚礼的社会中，被默认为不是“无礼的”。决斗甚至是蓄意谋杀，都可超越法理被他们所原谅甚至尊敬。对生命的漠视让他们的尚礼精神缺少了主心骨，变得畸形而矛盾。

日本人喜新而顽固。他们欢天喜地地接受着大化改新、明治维新、战后重建所带来的翻天覆地的变化，却难以更改许多早已过时的繁文缛节：早已完成资产阶级革命，却固执地保留下天皇；早已进入热武器时代，却执拗地在各大战场用刀；曾有着最先进的巨舰大炮，却缺乏最基本的损管与救援设备……因此，他们会使用最先进的战机，采取最古老的战术——撞击，组成二战中臭名昭著的“神风敢死队”，以此来捍卫他们的喜新与顽固。

日本人服从而不驯。他们会服从最严苛的命令，也矛盾地违背着最基本的准则。他们愿意服从上级的一切指令，即便是切腹自尽；但以下克上却总是成为常态：战国时，家臣推翻大名，大名推翻幕府；二战时，下级军官屡屡刺杀高级官员。纪律严明的

他们，却同时自由散漫，二者本来无法并存，却戏剧般地共同表现在日本文化之中。

爱美，却又黩武；尚礼，却又好斗；喜新，却又顽固；服从，却又不驯。“并行却相悖，并育却相害”成为了日本文化的现实。所有的这些元素抵触、矛盾、冲突，却畸形地聚在一起。让当代日本和谐而暴力、谦逊而积极、摩登而古朴、拘束且自由。一切，在二律背反中蓬勃萌芽，一切，又在二律背反中畸形生长。《菊与刀》一书中的日本，让人费解，却让人心驰神往；让人赞叹，却让人黯然神伤。一切都并行并育，成就了在二律背反下依然茁壮成长的现代日本。

二律背反—『菊と刀』を読んで 日本の感性について得たもの

韋雨果

中国傳媒大学電視学院

初めて見た日本は、モダンで地味な国でした。東京タワーに上ると遠い富士山の澄みわたる美しさを眺められ、スカイツリーのそばでは隅田川の清らかさを望めました。神社の傍を新幹線が飛ぶように走り、鳥居の外にある空港は往来が盛んでにぎやかでした。自然と人文が交わり、古さと新しさが衝突し、静謐と喧噪が重なり合う地でした。「万物並び育して相害せず、道並び行われて相悖らず」〔訳注：『論語』中庸〕という言葉があるように、東京の盛んな車の往来から北海道の生い茂った林が積み重なる青緑色まで、日本列島には調和しつつ万物が納まって、互いに照り映え、侵害しあわず存在していました。

再び日本を見たのは、アメリカの文化人類学者のルース・ベネディクトが著した『菊と刀』を通してです。この本で彼は、日本の近代に急発展した物質の成果を捨て、精神面から日本人と大和民族の性格を探究しています。この本を読んだ後、自身の日本に対する第一印象が、波がきらきらと輝く日本の氷山の一角に過ぎなかったと気づきました。日本はもっと重層的で、探求、発見、検証の待たれる要素も含まれていたのです。読み終えて気づいたことは、複雑さ、対立、互いの矛盾さえ、とくに日本の文化の各方面に染み渡っているということです。

日本人は美を愛しつつ武力を乱用します。「月さすや谷をさまよ

ふ螢どち」[原石鼎の俳句]「もののあはれ」の美は江戸時代から風向き次第で夜に潜み、文学から文化に潜んで、日本の文化に不可欠な古い要素になっています。長谷川等伯はきわめて少ない線で数本の松の木を描きすぐ筆を収めながら、余白を生かして松林の深遠で静かなもの寂しさを描写しています[『松林図』、長谷川等伯]。「幽玄」の美は百年前には浮世絵や水墨画の中で余白となり、黙々として日本人の独特な美学の文化の薫陶を受けてまた形作っているのです。大和民族はそれを自ら体験し実行して、一代一代と伝わって、「美を愛する」ことが国の主流になりました。しかし、古代の何度もの「合戦」であれ近現代の何度もの侵略戦争であれ、日本人は美を愛すると同時に美を壊し続けています。壊滅と殺戮の中で両手を鮮血で満たした日本の軍人は、それでも悠然と茶道や花道の美を楽しみ、自分の胸にある美が壊されると死をもって殉じました。秋の葉の静かな美のように、最後の一縷の美を添えていたのです。美を愛しながら美を壊す。武力を乱用しながら和を尊ぶ。

日本人は礼儀を尊びながらも戦いを好みます。祝日のたび神社の太鼓が響き、美しく輝くのは日本街頭の常態で、祝日に対する尊重と伝承が、懇ろに礼儀を尊ぶその心を実証しています。謙遜語と敬語は複雑に入り組んでいて難解で、なのにさまざまな人が柔軟に応用しており、日本の首相でも宿泊したホテルの掃除係に心からの感謝状を書くことがあります。言葉と顔色で人の心を探ることが身につけられず、礼儀作法が分からないと、日本社会では立脚しにくいものです。しかし武士道精神に支配された彼らは、自分が死ぬか相手が死ぬかという最も野蛮な方法で対立を解決するのです。仇同志が出会うと、血しぶきが上がることになります。他人の生命を非情にも剥奪していながら、敵討ちは礼儀を尊ぶ社会の中では「無礼」ではないものと黙認されます。決闘さらには謀殺まで、法律の原理を越えて許され、尊敬されることさえあるのです。生命の軽視により彼らの礼を

尊ぶ精神は抛り所を欠き、矛盾したものに歪んでいます。

日本人は新しいもの好きで頑固です。彼らは大化改新、明治維新、戦後の再建による天地をくつがえすほどの変化を狂喜して受け入れながらも、とっくに時代遅れの煩わしい虚礼をなかなか変えられません。とっくにブルジョア革命を終えていながら天皇制の存続に固執。とっくに火器の時代に入っているのに、意地を張ってそれぞれ大戦場で刀を使い、かつて最も先進の大艦大砲を持っていながら、最も基本的なダメージコントロールと救援設備は不足……そのため、彼らは最も先進的な戦闘機を使って最も古い戦術である突撃を採用し、第二次世界大戦での悪名高い「神風特別攻撃隊」を結成し、新しいもの好きと頑固さを守ろうとしたのです。

日本人は服従しても飼いならされません。彼らは最も苛酷な命令に従いながら、矛盾して最も基本的な規範に背くこともあります。彼らは切腹自尽であっても上級の指令すべてに進んで従いますが、下克上もよく起こっていました。戦国時代に家臣が大名家を転覆させ、大名が幕府を覆し、第二次世界大戦では下級の将校や士官が上官を暗殺する事件も頻発しています。規律が厳しい彼らは、同時に自由放漫で、両者はもともと共存できないはずなのに、ドラマさながら日本の文化の中で共演しています。

美を愛しながら美を壊し、礼儀を尊びながらも戦いを好み、新しいもの好きながら頑固で、服従しても飼いならされない。「並び行われて相悖り、並び育して相害す」が日本文化の現実になっています。こうした要素の抵触、矛盾、衝突、不均衡が寄り集まっているのです。現代日本の調和と暴力、謙虚さと積極性、モダンと古風、拘束と自由。すべては二律背反の中で盛んに芽生え、すべては二律背反の中で歪んで育ちます。『菊と刀』の中の日本は、難解ながら心を奪うものがあり、人を賛嘆させながら意気消沈させるものでした。すべては平行して生まれ、二律背反の中でなお近代日本が育ったのです。

佛法王法俱灭：比叡山的织田信长



孔劲阁

四川轻化工大学外语学院

笹川杯作文コンクール 2019 年度二等奖

最开始知道织田信长这个名字，是某款游戏中有些中二的“第六欲天魔王”，当时还觉得好笑——似乎战国时代的日本人都喜欢给自己起一些奇怪的名字。可是后来认真研究过后才知道，这嚣张的名头后面是什么——是火烧比叡山；是一向宗的覆灭；是神权政治的衰亡；是织田信长的政治抱负——是人主的国家，而不是神主的国家。传教士路易斯·弗洛伊斯说“信长聚集全国的神像与佛像，他的目的并不是要崇拜这些偶像，而是要这些神佛崇拜他。他认为自己就是神，在他上面没有创造万物的神。”武田信玄给织田寄了封署名为天台座主沙门 - 信玄的信，他便回敬一封署名为第六天魔王 - 信长的信。他用佛教中魔王的自称告诉其他人——我就是神。

他是嚣张的，也是理智的。

794年平安京成立后，佛家势力空前强大，甚至到了天皇的死与继位都要通过和尚之手实施密教仪礼。中世日本的摄关政治和院政体制正是产生于这样的神权之下。十世纪中叶，武装僧兵出现。战国时期，公家，武家，僧家三大势力并立。甚至有如本愿寺般成为实际上的大名的例子出现。

宗教的力量不该与政治结合，一个国家的根基，更不该是神学——织田信长这样想到。他已经走在了那个时代的最前面了，我们站在上帝视角，轻而易举的就可以举出一连串罗马教会的黑暗时代的例子，但织田信长在那样一个时代，宗教是民众的普遍信仰，是割据一方的经济政治实体，他面对的不仅仅是那些僧侣，还有所有站在僧侣背后的人。他对害怕天罚的明智光秀说“光秀你难道还不明白，那些佛像只是金属和木头而已”，他面对的，不是天罚，而是背后的人心。比叡山的大火烧光了那些金属和木头，一向宗覆灭，武田信玄说此举是佛法王法俱灭，至今日本仍有许多史学家称他罪大恶极。

他将自己放在天下人的对立面。

可他还是做了，并且义无反顾。织田信长当时的目标是天下布武，一统日本。花费如此大的精力去对付宗教势力实属有些吃力不讨好，对付分散的大名显然比对付至上而下纵横全国的宗教势力要简单许多，更何况当时的大名大多信仰佛教。而将神权从政治中分离得到益处也不是一时半会可以显现出来的。他不仅仅是为了当下的日本，更是为了后世的日本。他没有与虎谋皮，联结寺庙势力不断吞并扩大，他的眼光，一开始就放在了后世。

在他之后，丰臣秀吉，德川家康继承了他的道路。日本长期的宗教战争被终结，信仰被整合，且不再干预国家机器的运转和普罗大众的生活。

或许多年前皈依法华宗的织田信长不会知道，不久的将来，他成为了剑指比叡山的第六天魔王。而本能寺的大火中，织田信长叹息着世事无常，也不会知道，多年之后，他用血与火的代价铺就的道路，将日本从桎梏中拯救了出来。

他这一生，从尾张国的大傻瓜，到织田家的家督，到美浓国的国主，桶狭间战役，稻叶山城合战，比叡山大火，京都阅兵，天下布武……再到本能寺的大火。从织田庶家不受宠的长子，到天下布武的第六天魔王，起落浮沉，波澜壮阔。我常常觉得，是

不是他再多活久一点，天下布武真的可以实现。他总让我想起曹孟德，想起叶卡捷琳娜大帝，或许这些人活得再久一点，又是另一番天地。或许慧极必伤是真的，人生无常也是真的。

周作人所翻译的《平家物语》中，有这样一段诗——“人生五十年，如梦亦如幻，有生亦有死，壮士复何憾。”——来自于日本传统戏剧幸若舞中的名篇《敦盛》。这首和歌本是熊谷直实为平敦盛做的殉死舞。一之谷合战时，平敦盛为敌将熊谷直实所杀，从儿时好友到拔刀相向，熊谷直实感慨世事无常，故作此歌。但大多数人了解此歌，是因为传闻中织田信长在桶狭间之战前夜与本能寺之变前都曾咏唱过。或许真是一语成谶，他笑着世事无常，送走了今川义元，他叹着世事无常，在熊熊大火中，结束了自己的一生。

但传闻永远是传闻，我们或许永远都无法知道，那一夜天守阁的大火中，他想了什么，说了什么。但唯一确定的是，他的一生真如歌中所唱。

人生五十年，与天相比，不过渺小一物。

看世事，梦幻似水。

任人生一度，入灭随即当前。

此即为菩提之种，懊恼之情，满怀于心胸。

.....

放眼天下，海天之内，岂有不灭者。

一度生を享け、灭せぬもののあるべきか。

一度享此浮生者，岂得长生不灭。

仏法も王法も共に滅ぶ 比叡山の織田信長

孔勁閣

四川軽化工大学外語学院

初めて織田信長という名前を知ったのは、某ゲームで少し中二病がかった「第六欲天魔王」でした。戦国時代の日本人は自分に妙な名前を付けるのが好きだったのかと当時はおかしく感じていました。しかし後になってまじめに研究してから、この増長した名前の背後にあるものを知ったのです。比叡山の焼き討ち、一向宗の掃討、神権政治の衰亡、神聖なものではなく人間が主権を持つ国という織田信長の政治信条でした。宣教師ルイス・フロイスは「信長は全国の神像と仏像を集めた。彼の目的は決してそれらの偶像を崇拝することではなく、そうした神仏に彼を崇拝させることだった。彼は自分が神であり、彼の上に万物の創造神はいないと思っていた」と述べています。武田信玄が織田信長に天台座主 僧侶 信玄と署名した手紙を出すと、その返信には第六天魔王 信長と署名されていました。彼は仏教の魔王を自称することで他人に自分は神であると伝えていたのです。

彼は増長していながら、理知的でもありました。

794年に平安京が成立してから、寺院の勢力が前例のない強大さとなり、天皇の死や皇位の継承さえ和尚の手で密教儀礼を受けなければならないほどでした。中世日本の摂関政治と院政体制はまさに、このような神の権威の下で生じていたのです。10世紀中葉、武装した僧兵が出現。戦国時代には、公家、武家、

寺院の三大勢力が並立していました。本願寺のように事実上の大名になってしまう例まで出てきました。

宗教の力は政治と結び付けるべきではなく、まして一国の基礎は宗教学であるべきではない、と織田信長は思い付いたので。彼はすでにその時代の最前線を歩いていました。今の私たちは神の視角に立って、一連のローマ教会の暗黒時代の事例を挙げるのがたやすくできますが、信長の時代は、宗教は民衆の普遍的な信仰で、一地方に割拠する経済的政治的実体でした。彼が直面していたのは僧侶だけではなく、その背後にいるすべての人々だったのです。彼は天罰を恐れる明智光秀に対して「まだ分からないのか、仏像は金属と木に過ぎないのが」と話しています。彼が直面していたのは天罰ではなて、背後にある人の心でした。比叡山の大火はそうした金属と木を焼き尽くし、一向宗は全滅しました。武田信玄は仏法も王法も共に滅ぶと評し、今なお日本ではたくさんの歴史学者が信長を極悪非道と語っています。

彼は自らを天下人の反対側に置きました。

しかし彼はやはり天下を獲りに行き、後に引けなくなりました。織田信長の当時の目標は天下布武、日本統一でした。これほど大きい力を費やして宗教勢力に対処しても、実際にはその尽力が感謝されることはなく、分散している大名への対処は全国を網羅する宗教勢力よりずっと簡単でした。まして当時の大名は多くが仏教を信仰していました。政教分離の利点は一朝一夕に見えるものではありません。彼は当時の日本のみならず、後世の日本のためにもなったのでした。彼は無理な相談をせず、寺院の勢力を結びつけて絶えず併呑して拡大していきました。彼の目は初めから後世に向けられていたのです。

彼の後は豊臣秀吉、徳川家康がその道を受け継ぎました。日本の長期にわたる宗教戦争が終結し、信仰は統合されて、しか

も国家機関の運営や大衆の生活に関わらなくなったのです。もしかすると数年前法華宗に帰依した織田信長は、遠からぬうち比叡山に矛先を向ける第六天魔王になると知らなかったかもしれません。本能寺の大火の中で織田信長は世の無常に嘆息していますが、何年も後にその血と火を代価に敷いた道が日本を束縛の中から救い出したことも知るよしはありません。

彼の一生は尾張の大うつけから織田家の家督を継ぎ、美濃の国の主となって、桶狭間の戦い、稲葉山城の戦い、比叡山の焼き討ち、京都閱兵、天下布武……そして本能寺の大火。織田家の寵愛を受けない非嫡出の長子から天下布武の第六天魔王まで、浮き沈み、勢いのすさまじいものでした。彼がもう少し長く生きていたなら、天下布武は本当に実現できていたのだろうかと思えます。彼は曹孟徳やエカテリーナ大帝を想起させます。彼らがもう少し長く生きていたなら、また歴史は違っていたでしょう。もしかすると慧極まれば必ずや傷なうということが真理で、人生の無常も真理なのかもしれません。

周作人が翻訳した『平家物語』の中に、「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり、一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」という詩があります。この出典は幸若舞の名高い「敦盛」です。もとは熊谷直実が平敦盛の殉死に捧げた舞いの歌でした。一ノ谷の戦いの時、平敦盛は熊谷直実の手にかかって命を落としましたが、子供のころからの親しい友人が刀を抜き合ったことに熊谷直実は世の無常を感じ、この歌を作ったとのこと。この歌を知る人が多いのは、織田信長が桶狭間の戦いの前夜と本能寺の変の前に詠じたからです。もしかすると本当に予言となってしまう、彼は世の無常を笑って今川義元を葬り、世の無常を嘆いて燃えさかる炎の中で一生を終えたのかもしれない。

しかし噂は永遠に噂です。その夜の大火の中で彼が何を思い

何を語ったのかは永遠に分からないかもしれません。ただ一つ確かなことは、彼の一生が本当に歌の中にあるようなものだったことです。

人生の五十年は、天と比べればちっぽけなものにすぎません。世事を見ると、夢幻で水のようなもの。

人生は一度きり、死はすぐそこにあります。

それこそが菩提の種、思い悩む心、胸にあふれる思い

……

天下に目を向けると、海と空の間で滅びぬものはありません。一度生を享け、滅せぬもののあるべきか。

一度生を享けたものが生き続けることはないのです。

写给我心里藏着的那个小孩



彭宏宇

上海交通大学 材料科学与工程学院

笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

在诗集的封面上有这样一行字“写给你心里藏着的那个小孩”，我有些忧伤、惊喜又有些轻松地看着它，它好像看穿了我，我的目光停留在这句话上，久久不愿离去。我想我已经决定要用诗的眼睛来找寻她。

相遇

“向着明亮那方，哪怕一片叶子，也要向着阳光洒下的方向。”这首诗是我与金子美铃的第一次相遇。我问叶子、我问飞虫、我问住在都市里的人们啊，为什么呢？为什么对光明如此炽热的追求？哪怕一片叶子、哪怕烧焦了翅膀、哪怕只是分寸的宽敞，都要向着明亮那方。没有答案，但“向着明亮那方”不断地呼唤，让我听见美铃的低语“即便人生艰难，也要看到世界的美，保持温柔的心，向着明亮那方，一路远航”。

美铃这个姑娘就像向日葵一样，种在阳光下，它撒下阴影，是寂寞的味道。我想象她趴在窗户上，呆呆地望着远方，她好寂寞啊，她的寂寞可以随处安放，因为她的寂寞里有大海、星星、冰雪、麻雀、芥子木偶、蚕宝宝、扑克牌女王、歌留多……她的寂寞创造着一个又一个的世界。她想要搜集全日本散落的花瓣，撒向大海，

好让她在美不胜收的花海中驶向遥远的他方，去到那能将世界一览无余的地方。“如果我是男孩，我，真的想去”，可她不是男孩。我只看见在沙滩上孤零零地坐着一个女孩，对着遥远的海上的那艘船儿说“请你一直在海天之间，向着远方，一路远航。”

在金子美铃留下的 512 首诗中，有快乐、期待和希望，那么温暖、明亮；也有忧伤、哭泣和悲痛，那么让人心疼。我不知道为什么我会感到缺失，但她的诗歌就是这样抚慰着我。读诗的时候，指尖的雪会融化，因为脑海中“快乐”的鱼儿游来游去，我的心田上也开了一朵叫“温暖”的花。我看见有一个可爱的小女孩在向我招手，对着我笑。她向我走进，想要拥抱我，她要为我讲一讲她的故事。她的小调皮把我逗得直笑，跟着她愉快的脚步哼起歌谣；她小脑袋瓜子的奇思妙想也震撼着我，“好棒”；她的小寂寞、悲伤也让我感到难过，我拿起手绢想帮她擦擦眼泪。无论快乐也好悲伤也好，她那感知万事万物的柔软细腻的内心和那永远存在于我想象中的笑脸早已温暖、治愈了我。

回味

很难想象，构建了这样一个丰盈、细腻温柔的世界的诗人，她的一生其实充满了艰难和悲伤。“一个渴望父母关爱，却无法得到满足的小女孩；一个不被看见的幼小心灵；一个无法给予孩子情绪抚慰的母亲；一个寂寞失落的只能通过外界幻想来获得喜悦和安慰的小小身影”，可她的内心却还是充满着爱，给自己，也给万事万物的爱，至始至终她都保留着自己的那颗赤子之心。

诗歌没有年龄，只有孩子是时间的上帝，在诗歌里我也可以做回孩子，沉醉在甜甜的酒里。我本以为这酒不会醉人，但多少个夜里，我闭上眼睛，有些词、有些话就一个劲儿地往外蹦，它们争抢着逃离我的大脑，可是我的脑袋已经很疼了，我想安静，不想它们吵闹，可它们还是想要逃离这副躯壳，为了成全它们，我拿出了白纸，用笔将它们安顿。

不知道是从什么时候开始，我喜欢上了诗歌，喜欢上了一个个字之间随意碰撞出的火花，那无与伦比的想象力带给我的震撼和惊喜。或许是从谷川俊太郎《二十亿光年的孤独》《三万年前的星空》……我开始觉得自己也把“活着喜欢过了”。我太爱诗的美丽，它带给我太多的感动，为一个名词搭配上了另一个不属于它的名词或者动词，我常常热泪盈眶，它简洁、留白，然后是平静和满足。每一次我记录下看到的那些奇思妙想，就像发现了一个宝藏，我如饥似渴，想要把它们打包、另存在我的大脑。这一首首歌谣，是时间美人之歌，将我们从青年、老年带回到童年，好像完成了一次生命精神上的循环。

重逢

合上书，我结束的是一段对话，也是一段旅程。我想起来辛波斯卡的这句话“她开始自遗忘的镜子，打捞那些早已沉没的脸。”语言文字是如此的相通，我回味着，脑海里浮现出那一丝一缕的文化共鸣。每每阅读完金子美铃的诗，我就和着她的诗写作，小时候的调皮、欢乐和那些许忧愁——在我的笔尖闪现，我看到了曾经的自己，我看到她还保留着一份纯真，天真烂漫地好奇着这个世界的一切，一切的语言都那么自然，好像她从未离去。我知道她的脆弱和柔软，但因为她的存在，我的生命更加丰盈，我有好多的无边无际的想象想在白纸上落地生根。我想好好保护她，像金子美铃那样，不放弃热爱这个世界，即使有一天我不再能看到鱼儿的眼泪、听到花儿的哭泣……我打捞起了曾经的自己。

是否，我们的心里都住着一个人，她拥有我们童年的全部记忆，她始终会把红太阳当成咸蛋黄，而我们早已知道月亮不会发光；她会问为什么“从乌云里落下的雨，却闪着银色的光”，而我们却说“那有什么好奇怪的”。我们看不见她，但她就在那里，从未离去。

它看穿了我，我内心的一片天地。

我看到了她，住在我心里的孩子。

阅读书籍：金子美铃童谣诗集两册《向着明亮那方》《秋天，一夜之间》

【日本語訳】

私の心の中の隠れた子供へ

彭宏宇

上海交通大学 材料科学与工程学院

詩集の表紙の上に「あなたの心の中の隠れている子供へ」のような一行があり、私は、いくらかの憂い悲しみ、意外な喜びを感じつつ気楽にそれを見ていました。私が看破されているようで、私の眼光は釘付けになり、長い間そこを立ち去る気になれませんでした。すでに詩の目で彼女を探そうと決定していたのだと思います。

出会い

「明るい方へ 明るい方へ 一つの葉でも 陽のもるところへ」この詩は私と金子みすゞの初めての出会いです。葉、とぶ虫、都会に住む子らに、どうしてなのか問いかけます。どうして光をそこまで熱く追求するのか。たとえ一枚の葉だとしても、たとえ翼が焦げるとしても、たとえわずかな広さだとしても、明るい方へ向かうのです。答えはありませんが、「明るい方へ」絶えず呼びかけて、「たとえ人生が苦難に満ちていても、世界の美を見て、やさしい心を保ち、明るい方へ、一途に航海するの」と美玲が小声で話すのが聞こえます。

美玲というこの女の子はヒマワリのように、日光の下に植えられ、影を落としており、寂しい気分です。彼女が窓の上で伏せ、ぼんやりと遠方を眺めているとさぞや寂しかろうと想像します。彼女の寂しさは随所に置くことができます。なぜなら彼女

の寂しさには海、星、氷雪、雀、こけし、蚕、トランプのクイーン、かるたがあるのです。彼女の寂しさは一つ又一つの世界を創造しています。彼女は日本中の散る花びらを探し集め、海にまき散らして、見きれない花の海の中で遙か遠い他の場所へと船を走らせ、世界を一望できるところへ行こうとしています。「もしも男の子だったら本当に行きたい」、でも彼女は男の子ではありません。私には砂浜の上で寂しく座っている女の子が、遙か遠い海上の船に向かって「ずっと海と空の間において、遠くへずっと航海して」と言うのだけが見えます。

金子みすゞの残した 512 首の詩の中には、楽しみ、期待と希望があり、温かくて、明るいもの、また憂いと悲しみ、むせび泣きと悲痛で、心が痛むものもあります。どうして私が遺失を感じるのか分かりませんが、彼女の詩歌は私をこのように慰めてくれます。詩を読むとき、指先の雪は解けるでしょう。脳裏で「楽しみ」の魚が泳いで往来し、私の心にも「ぬくもり」の花が咲いているので。かわいい小さな女の子が私に手を振り、私に笑っているのが見えます。彼女は私に入って、私に抱きつき、お話しを聞かせてくれたようです。彼女の腕白さに私はずっと笑い、彼女の楽しい足どりについて行って歌を口ずさみ始めます。彼女の小さい頭のみごとな発想に揺り動かされ、「すごい」。彼女の小さな寂しさ、悲しみも私には苦しく感じられ、ハンカチを取って彼女の涙を拭いてあげたくなりました。楽しみでも悲しみでもよいのです。彼女が万事万物を感じ取る柔かく細かい内心と私の想像の中で永遠に存在するその笑顔がとっくにあたたかく、私を癒やしてくれたのです。

回想

このように一つ一つ豊かできめ細かいやさしさの世界を作り上げた詩人の一生が、実は苦難と悲しみに満ちていたとは、想

像しにくいものです。「両親の関心と愛を渴望しても、満足を得られない小さな女の子。見えなかった幼い心。子供に感情的な慰めを与えることができない母親。寂しく空虚な、外界の幻想を通してしか喜びと慰めを得られない小さな影」でも、彼女の内心は愛に満ちており、彼女は自分にも万事万物にも愛を与え、最初から最後まで自分の純真な心を留めていました。

詩歌には年齢がなく、子供だけが時間の神で、詩歌の中では私も子供に戻り、とても心地良いお酒に酔いしれることができます。このお酒に酔うとは思っていませんでしたが、何夜か、まぶたを閉じると、いくつかの言葉、お話が力いっぱい飛び出し、先を争って私の大脳から逃げようとしてきました。すでに頭が痛かったので、私は争わず安静にしていたかっただのですが、やはりこの肉体から逃げたがるので、彼らを助けるため、私は白紙を取り出して、ペンで落ち着かせることにしました。

いつからか、私は詩歌を好きになっており、一つ一つの字の間で気ままに散る火花、その比類ない想像力がかかる驚きと意外な喜びが好きになっていました。もしかすると谷川俊太郎『二十億光年の孤独』『三万年前的星空〔日本では『私』〕』から、私は自分も「生きているのが好き」と感じ始めたのかもしれませんが。私は、あまりに多くの感動をくれる詩の美しさを愛してやみません。一つの名詞のためにもう一つのそこに属さない名詞や動詞を組み合わせてみると、いつも感激の涙が目にあふれます。その簡潔さ、残す余白、それからの落ち着きと満足。目にしたそれらのすばらしい発想を記録するたび、宝を見つけたような心地で、私は渴望したように、それらを包んで大脳に保存したくなります。この歌は、『時間美人』『中国のネット小説』の歌で、読者を青年、老年から少年時代へと連れ帰って、生命の精神上的の循環を完成するようです。

再会

本を閉じて私が終えたのは一つの対話であり、一つの旅です。私はシンボルスカの「彼女は忘れた鏡から始まって、とっくに沈んだ顔を引き上げる」という話を思い出しました。言葉にはこんなにも相通ずるものがあるのです。回想すると、脳裏でひとすじの文化の共鳴が浮かびます。金子みすゞの詩を読み終えるたび、よく私は彼女の詩について文章を書いています。小さい時の腕白さ、喜びと少しの憂いが一つ一つ私のペン先にぱっと現れて、かつての自分が見えます。まだ純真さを残し、天真爛漫、この世界のすべてに好奇心を持っている自分が。すべての言葉がそれほど自然で、彼女がまだそこにいるかのようです。私は彼女のもろさと柔らかさを知っています。しかし彼女の存在のおかげで、私の生命がより豊かで、多くのはてしない想像が白紙の上で根をはるのです。私は彼女をしっかりと守って、金子みすゞのように、この世界を心から愛することを放棄しないでいたいと思います。たとえ魚の涙が見えなくなり、花のむせび泣きが聞こえなくなる日が来ても……私はかつての自分を引き上げ始めました。

私たちの心の中に、少年時代の全部の記憶を持った人は住んでいるのでしょうか。彼女はずっと赤い太陽を卵黄と見なすでしょうが、私たちは月が発光することはありえないことをとっくに知っています。彼女は「黒い雲から降る雨が、銀に光っていることが」どうしてなのかと問いかけるでしょうが、私たちは「何もおかしなことはない」と答えてしまいます。彼女は見えませんが、そこから一度も立ち去ってはいません。

私と私の内心の一面の天地を看破しています。

私は彼女を見ました。私の心の中に住んでいる子供を。

读《解忧杂货店》有感



宋科淇

鞍山师范学院 外国语学院

笹川杯作文コンクール 2020 年度二等奖

每个人都要经历站在分岔路，回顾昨日的嶙峋和眺望远方的茫然交错若失的模样。人生是一场艰难的旅途，过程痛苦而煎熬，如何抉择与救赎。《解忧杂货店》中东野先生会给你带来答案。

在四年前的，一个慵懒的午后。伴着点点蝉声与钟鸣，东野圭吾的文字像一架急驰的列车，倏忽地撞入了我的脑海。是什么时候呢，童话的面具被撕裂，愈发成长，愈能发觉这世间残忍的真实。东野圭吾则通过《解忧杂货店》深沉且温柔的笔触唤醒了人心隐藏的善良。

翔太、敦也、幸平，三个人对这个世界充满了愤怒和抵触的情绪，这是多么熟悉的情感啊。我从他们每一个身上都能看见自己曾经的影子，因为这三个人就是曾经误入歧路但仍心存善念的我们呐。有时候并不是我们希望坠入黑暗，只是在地狱的边缘没有人间的天使伸出翅膀。

无论是纠结梦想与陪伴即将过世男朋友之间的月兔，到不知道是否放弃音乐而继承鱼店的鱼店音乐人；从到纠结于是否生下没有父亲的孩子的绿河，到是否跟父母一起连夜潜逃的保罗。都贯穿着救赎心灵的理念。事实经验告诉我们，救赎是相互的，无

论是救赎和被救赎，人类情感中最美好最绚丽的花朵，在东野先生的笔下呈现，这大概就是人类与动物之间的区别吧。

“这么多年咨询信看下来，让我逐渐明白一件事。很多时候，咨询的人心里已经有了答案，来咨询只是想确认自己的决定是对的。所以有些人读过回信后，会再次写信过来，大概就是因为回答的内容和他的想法不一样。”每一代人都会有自己的迷惘，这是原文中我最喜欢的一段话。

考虑的在纠结的事情，其实心中早有选择，只是需要有人来认同才会更加坚定地去做。或者是即使是别人不认同，事情的方向也会是向自己想要的方向发展。

很有意思的是我们不能凭自己的主观去断定对方是怎么样的人，就像那些咨询者，在没有完全说出实情的时候，我们无法想象他们到底是怎样的人，也没法去揣测当事人的处境更加无法去想象当事人在未来会有怎样的发展。就像三个青年劝阻运月兔放弃运动会反而使她坚定了信念，这些是当时无法预料到的。亦或是绿河女儿对绿河的死的揣测，以为是妈妈故意想带着女儿一起自杀一样，其实事实是截然相反的，这些矛盾构成了一种对立的美感，割裂且统一。

“虽然至今为止的道路绝非一片坦途，但想到正因为活着才有机会感受到痛楚，我就成功克服了种种困难。”

选择可以改变一个人的人生，但是即使是做了错误的选择又将如何呢？只要是在未来的日子里找到自己的本心，寒冬肆虐的时候也会有暖流喷涌而出。

天空飘着雪花，是晶莹六角形，珍贵的善意在冬季里愈发迷人。在春天到来之前，我们相互依偎，步伐坚定的走下来，迎接旭日的光辉。只要心中有爱，便能面朝大海，春暖花开。

从绿河和保罗的身上感受到，其实我们往往只发现了事情最浅显的一部分，原来这个世界最深沉的爱从不需要用言语来表达，我想起了我的父母。

他们仿佛一条分离的线条，只短暂的相触后便从彼此的世界中平行，永不相交。我开始变得敏感，自卑又脆弱，如同蜗牛坚硬的铠甲般，将柔软抵在心底，锋利对准它人。

我一度叛逆，空啤酒瓶，微醺，香烟，伤痕，嘈杂晃动的镜头，窗外的宿舍，真实撕裂的空旷，纯粹而清晰地嘶吼。没人爱我，连我自己都不爱，直到我遇到了温暖的解忧杂货店。

我曾经如此地恨我的父亲，恨他的自私，恨他的软弱，恨他的暴虐。我们在彼此对抗中，忽略了浓厚到甚至坚硬的情感，哪怕就算是恨，也抽象成一种空乏的感情。读到保罗在若干年后察觉父母用生命给予他的保护时，我的眼泪同保罗一样喷涌而出，溅湿了整个纸张。

恍然间我发觉，我的父亲身影不再雄伟，变得有些佝偻；健壮的双手不再有力，赤膊的双臂上已布满青筋；固执的白发似有了生命一般，刺进了我偏颇的瞳孔，刺的眼发酸。成长和宽恕，就在一瞬之间。

我渐渐地理解了许多东西，在书本之外。剥下那层僵固的外壳，红肿的肩头、细碎的嘱托、睡熟后轻轻捻起的被角，似乱麻般从零碎的记忆片段中翻涌出来。与之同时降临的，一股极力抵抗又熟纳陌生的血脉将我与父亲紧紧联接。

读一个人的文字，要从它的情感中抽离出一种力量。

喜欢《解忧杂货店》的理由在于盘根错节的故事里，都有你自己的影子。你可以进入这个光怪陆离的世界，跟从东野圭吾，寻找在最美好也最荒谬的时代流失的人与人之间单纯的善意与真诚。

【日本語訳】

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』を読んで

宋科洪

鞍山師範学院 外国語学院

誰もが分かれ道に立って、昨日の岩場を振りかえり、遠方の漠然として入り組んだ様子を眺めて迷子のようになる経験をします。人生は苦難に満ちた旅路で、道のりはあまりに苦しく、いかに選択し救済するかです。『ナミヤ雑貨店の奇蹟』で東野先生が解答を持ってきてくれるでしょう。

四年前のある怠惰な午後。セミの声と鐘の音を伴って、東野圭吾の文字が猛進する列車のように脳裏に突っ込んで来ました。童話のお面が引き裂かれたのはいつだったのか、成長すればするほど、世の中の残忍な真実さに気づけるようになります。東野圭吾は『ナミヤ雑貨店の奇蹟』の深くやさしい筆触を通して人の心に隠れた善良さを呼び覚ましました。

翔太、敦也、幸平のこの世界に対する怒りと反発に満ちた感情は、どれほどよく知っている感情でしょう。彼ら一人一人に自分のかつての姿が見えるのは、この三人が誤って岐路に入ってもなお、善を行おうとする心を持っている私たちそのものだからです。時には私たちが望んでいなくても闇に落ち、地獄の縁まで翼を伸ばしてくれるこの世の天使がいなくていいだけです。

夢か余命わずかな彼氏に寄り添うかで困惑している月のウサギから、音楽を諦めて魚屋を継ごうか分からない魚屋ミュージシャン、父親のいない子供を生むかどうかとまどっているグリーンリバー、両親と夜逃げしようかというポール・レノンに至るまで。すべて心を救うという理念が貫いています。事実の経

験が教えてくれるのは、救いはお互いさまということです。救う側であれ救われる側であれ、人類の感情の中で最もすばらしく最も煌びやかで美しい花が、東野作品で姿を現します。これはおそらく人類と動物の違いでしょう。

「長年悩みの相談を読んでいるうちにわかったことがある。多くの場合、相談者は答えを決めている。相談するのは、それが正しいってことを確認したいからだ。だから相談者の中には、回答を読んでから、もう一度手紙を寄越す者もいる。たぶん回答内容が、自分が思っていたものと違っているからだろう。」どの世代の人にも自分の困惑があって、このくんだりが一番好きです。

考え中のもつれた事情が、実は心の中ではとっくに選んであって、誰かが認めてくれさえすれば、しっかりと実行できるのです。もしくは、たとえ他の人に認められなくも、自分が求める方向にことが発展することもあります。

面白いのは、自分の主観だけで相手がどういう人かを断定してはならないことです。ちょうど相談者がまだ事情を語り終えていないうちは一体どういう人なのか想像できないように。当事者の立場を推測するわけにもいかず、当事者が将来どうなっていくのか想像できないのはなおさらです。三人の青年が月のウサギに運動を諦めないよう忠告したとき、かえって彼女が信念を固めたように。そのときは予想できなかったことでした。また、グリーンリバーの娘がグリーンリバーの死を、母親が娘と心中しようとしたのかと推測していましたが、実のところ事実ははっきりと反対でした。これらの矛盾はある種の対立の美感を構成しており、引き裂かれながらも統一されています。

「今日までの道のりは決して平坦ではなかったけれど、生きているから感じられる痛みもあると思い、乗り越えてきました。」選択は一人の人生を変えることができますが、誤った選択をし

てしまったときはどうでしょうか。未来の暮らしの中で自分の本意を見つけさえすれば、厳冬が容赦ないときでも暖かいものが噴き出してきます。

空には雪片が翻り、きらきらと透明な六角形で、貴重な善意は冬の中でますます魅惑的です。春が到来する前に、私たちは互いに寄り添って、堅実な足並みで歩き、朝日の輝きを迎えるのです。心の中に愛があれば、大海に向かって、春うららかに花開きます。

グリーンリバーとポール・レノンから感じたのは、実のところ私たちは事物の最も分かりやすい一部分だけを発見しているということです。そもそも、この世界の最も深い愛情は言葉で表現する必要がありません。私は両親を思い出しました。

彼らはまるで一本の分離した線が、わずかなふれあいの後、双方の世界の中から平行して、いつまでも交差しないかのようです。私は敏感になり始めて、卑屈、脆弱で、カタツムリのかたい鎧のように、柔軟さを心の底で支えて、鋭く照準を人に合わせました。

私は一度反抗して、ビール瓶を空けました。ほろ酔い、たばこ、傷跡、騒がしく揺れ動くレンズ、窓の外の寮、真実の引き裂かれた広がり、純粋なはっきりとした咆哮。私を愛する人はおらず、自身さえも、あたたかなナミヤ雑貨店に出会うまでは。

かつては父を恨んでいました。彼のエゴ、軟弱さ、暴虐を恨んでいたのです。反目しあううち、濃厚な、かたい感情まで見落としており、たとえ恨みであっても、抽象的に空虚で味気ない感情になっていました。ポール・レノンが数年後、両親が命を懸けて彼を守ったことに気づいたというところで、私の目からもポールと同じように涙が湧き出し、紙全体を濡らしてしまいました。

はっと気づくと、父の影はもう雄大ではなく、少し背が曲が

っていました。壮健だった両手はもう力強くなく、袖まくりした両腕は青筋だらけでした。頑固な白髪は生命があるかのように、私の偏った瞳に刺し入って、涙が出そうになりました。成長と許しが、一瞬の間にありました。

私は書物のほかにも次第にたくさんものを理解できました。こわばった硬い殻を外すと、赤く腫れた肩先、細かい言い付け、熟睡してからそっと持ち上げた布団の角が、乱麻のように雑多な記憶のかげらの中から湧き起こってきました。同時に訪れたのが、力の限り抵抗した、またよく知っているけれどよく知らない血筋が私と父をしっかりとつないでいる感覚でした。

一人の文を読むことは、その感情の中からある種の力を抜き取ることです。

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』が好きな理由は、複雑に入り組んだ物語の中に、それぞれ自分の姿があるからです。奇怪な様相をした世界に踏み入り、東野圭吾につき従えば、最もすばらしく最もでたらめな時代に流失した、人と人之間にある単純な善意と真心を見つけられますよ。